
僕は違います

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は違います

【Nコード】

N3669X

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

テンプレ転生したので、今度の人生は絶対死なないようなチートを貰った。よし、これで死亡フラグは全部無効だ！…あれ、苗字が織斑？なんだこのフラグ。…え、僕がISに乗れる？いやいや誤解ですよ、これただのチートです。はい？IS学園に編入？いやいや、なんで僕が…って、東さん。なんで全世界のTVジャックしてるんですか？そして何故そんな笑顔をこっちに付けてるんですか！？これはISを生身でブツ倒すチート主人公の物語である。息抜きに書きました、連載力

尽きたらすみません。

オリ主注意

L i f e 0 少年よ、英雄を抱け（前書き）

息抜きをしたかったんですが、一作品エタった自分としては続けられるか非常に心配だったりします。

が、頑張るぞ…あともう一つのほうも頑張るぞ…

Life 0 少年よ、英雄を抱け

誰だって死ぬのは恐ろしい。

特に僕の場合はそれが顕著である。

なにせ一回死というものを経験したから当然だ。いやはや、ロクなものじゃないんだよアレ。両義式さんも言っていただろう？死と対面するのは静かなことじゃない、むしろ闘争に近いことなんだって。

僕も経験したのは一瞬だったけど、できれば二度と体験したくないレベルだった。もう口じゃ説明できないよ、おぞましすぎて。

まあそんなわけで、僕はバトル展開とか大嫌いである。

いや、漫画とかで他人がやるならいいけど、自分がやるのが嫌だって意味だよ？他人の努力を否定する気はない。ただ、自分だけは安全でいたい。心の底からそう思う。

だから、僕は神様からチートを貰う時にこう言った。

『大英雄ヘラクレスと同じ能力くれ。設定は型月準拠で』

Bランク以下の攻撃全部無効！おまけに12回まで死んでも大丈夫！

ATフィールドと迷ったけど魔術とか無い世界ならこっちのほうがいいに違いないッ！この最強の防御力を持つてすれば、僕の生涯は安泰だ！いやっほう！！

と、思ってた時期が僕にもありました。

『う、おおおおおおおおおおおッ!!!』

耳を少年の叫び声が満たす。

カギ括弧がついているのは別に彼がカッコ付けているというわけではなく、ただ単に『ISに乗っている』からである。

ちなみに言うなら、彼は現在、僕の身体よりもでかい剣を必死に僕に向かって叩きつけようとしている最中だ。

「 どうしてこうなった」

世の中はうまく行かないもの、なのである。

チート印の動体視力やら身体能力でIS… 『白式』の白刃を紙一

重でかわしたり『素手で』ブン殴って刃を逸らしながら、僕は溜息をついた。

何が悲しくて、世界最強の兵器相手に『生身』で勝負を挑まなきゃならんのだ。いくらチートとはいえ色々やるせなくなってくる。加減してください。

…ああ、いや、向こうは僕のことを『装甲が無いIS』と認識してるから、遠慮も手加減も一切してこないのか。絶対防御を過信しすぎじゃね？まあ、実際間違っちゃいないんだけどね。その認識。

『こ、のおツ！！』
「おっと」

ISなりの空中機動を活かして振られた一夏の剣を、僕は最小限の動きで避ける。

…なんか段々、一夏の剣筋が冴えてきた気がするなあ。

剣道の勘が戻ってきたのだろうか？それにしただって空中の動きを織り交ぜた攻撃なんてそう簡単にできるものじゃないと思うんだけど。いやはや、よく戦闘中にそんなアツサリと成長できるな。主人公補正か。

ちなみに、こんなガチガチの近距離戦になってる理由はご存知のとおり、『白式』の武装には剣しか無いからです。男らしいね（姉さんも同じ装備だったけど）。

ついでに言っておくと、僕…つまり英雄ヘラクレスには弓の装備があるので、遠距離では意外と僕が有利である。まあ、さすがに弓がないと飛べない僕としては色々詰むからね。

まあとにかく、色々な事情から一夏はこちらに近づいて、斬る。斬る。

斬りまくる。

「…サラツと流してるけどこの状況、実は僕、けっこう怖い。『十^{ツドハンド}の試練』といえどもちよつと気を抜いたら僕の身体は傷つくかもしれないし、そもそも受けた『衝撃』はあるので、痛くないとはいえ身体が停止する。」

だから、僕はわざわざ相手の攻撃を避けて、防いで、受け流しているのだ。

とはいえ、そんな状況であることを一夏が知るわけもなく、彼の口から出るのは文句ばかりであった。

『くそつ…なんで、『装甲が無い』のにこっちの攻撃を防げるんだッ！違和感ありまくりだろ！』

「それは東さんクオリティのせいだねえ。あと、いくら平気だつて言われたからって遠慮なく剣ぶつけるのはお兄ちゃんどうかと思うんだ」

『千冬姉に勝てる相手に手加減できねえよ、零夏ッ！』
「いや、僕が勝った時は姉さんIS乗ってないから」

ひよつとして、一夏の中ではISく姉さんく僕、という不等号が並んでいるのだろうか…？微妙に間違っていないのが恐ろしい。

まあ、姉さんこと織斑千冬さんは生身でも超強いからねえ。そのせいか一夏も僕のことを変な意味で信用している気がする。

まあ、さすがに五次バサカことヘラクレスの能力を丸ごと保有してるんだ、これで生身の勝負に負けたら姉さんは英雄になっちゃうよ。IS乗ったら勝負はわからないけどね。

というか、僕はこういう戦闘とかが嫌だからこの能力を貰ったの
に、どうしてこんなことになっているんだろうか？
どうしてこうなった。どうしてこうなった！

とりあえずは、一夏の攻撃を捌きながら、この状況を整理するこ
とにしよう

L i f e 0 少年よ、英雄を抱け（後書き）

というわけで始めました、『僕は違います』、タイトルにセンスが無いのはきつと気のせいだ！

あと元ネタがわかってても良い子はスルーだ！くれぐれもローソンに凸ったりしてはいけないぞ！

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（前書き）

漂うマイナス臭。タイトルからも本文からもプンプンしてますね。
この更新速度いつまで続けられるのやら…

Life 1 大嘘吐き、世に憚る

ここはIS学園。

女性にしか扱えない兵器、インフィニット・ストラトスの扱いを学ぶ場所である。

数々の設備、優秀な教師などが揃えられたこの場所は当然ながら女子高である。世界にISについて学ぶための学園はここしか無いので、周りを見渡してみると結構外人が多く、カラフルな髪の人も多い。

…いや、髪については外人は関係ない気もするけどね。要はイラストの都合だよ言わせんな恥ずかしい。

…まあ、前置きはこのくらいにしておこう。

さて、ここで問題です。

どうしてそんな女子の園と呼ばれる場所に、僕と弟は制服を纏って放り込まれているのでしょうか？

「…気まずい…ッ!!」

「…言っんじゃない一夏…！僕も結構ギリギリだから…!!」

そんな極限状態に放り込まれた僕の名前は、織斑零夏
いわ

ゆる『転生者』だ。

付け加えると、僕は織斑一夏の双子の兄として生まれてきた。いやはや、なんとというテンプレっぷりだろうね？

主人公の兄って…できるだけ死亡フラグを立てないのが目標なのに、生まれた瞬間フラグまみれになってるじゃないか。何の罰ゲームなのさ。

このままだと一夏に巻き込まれて苦労したり、ひよっとすると主人公を押し付けられるんじゃないかと当時は思ったりもしたけど、じきにその不安は消えた。

だって、僕はISが『使えない』からね。

ちなみにこれは東さんのトコのISを触ってしつかりと確認した事実である。ふう、危ない危ない…ひよっとしたら使えるんじゃないかと思ってヒヤヒヤしたけど、これなら僕はどう頑張ってもIS学園に転入なんて事態にはならない！

「今思うとこれがフラグだったんだよなあ…」

「待ってくれ零夏！今お前に自分の世界に入られると俺は一人になっちゃうよ！！」

「知らんがな。現実逃避したいんなら予習でもしてなさい」

「その手があつたかッ！！」

そんなわけで僕は気をよくしてセカンドライフを楽しんでいく…
筈だったんだけどね。一体何が起こったのかというと、

東さんに転生者ってバレた。

…いや、本当にどうしてあの人はあんなに頭がいいんだろうか。
僕の些細な仕草から『十二ゴッフェハントの試練』の特性を見抜いて、なおかつ
巧みな誘導尋問によって僕の口を滑らせるように仕向けるだなんて
芸当をサラッとやるなんて普通できないと思うんだけど。

これが天才の実力であろうか。くそう、頭がよくて羨ましい。

『いや、アレはれーくんがわかりやすかっただけじゃないかな?』

『やかましい。モノローグに割り込むんじゃないやありません』

「えー、慣性をキャンセルでP I Cがうんぬん…ん、零夏? 誰と話
してるんだ?」

「ウサギさん」

変な目で見てくる一夏はスルーしよう。僕がおかしくなったんじ
やなくて、本当にどこからか束さんの声が聞こえたんだから仕方な
い。

そんな風に、『束さんパネエエエエ!!』と思いつつも、バレ
ては仕方ないので僕はある程度彼女に事情を話した。

『いや、要するに僕って平和に過ごしたいだけなんですよね』

『え? そんなに強いチカラがあるのに、れーくん何もしないの?』

『ええ。僕の夢は可愛い嫁さんに養ってもらうことですから』

『ふーん……ところで、それどう考えてもニートだよね!』

『ち、ちげーよ!』

確かこんな話をした気がする。今思うと酷い会話だなあ。

まあとにかく、僕としてはチートを自衛以外に使う気はない。お
まけに、どうせ何を言っても僕は『鎧』に守られているのでダメー

ジを貰うことは無い、という安心感もあった。

だから僕は東さんにサラッと

『世の中がどうなるかと、自分の周りが無事なら幸せなんですよ』
なーんて本音を喋ってみたわけさ。そしたら

『そっかー。…やっぱり、れーくんは異常だね！東さんと同じくらい！！』

とても嬉しそうに、彼女が笑ったのを覚えている。

「 皆さん、ご入学おめでとうございます！」

「 …ん？」

おや、何時の間にか先生が来ていたようだ。

まだ回想終わってないんだけど…ま、とりあえず現実逃避ができたから良しとするべきかな。いくらBランク以下の攻撃無効とはいえ、精神へのプレッシャーまで緩和できるわけじゃないからね。さすがにずっと観察動物扱いされるのもキツいんだよ。

しーん…

ちなみに観察の視線は現在進行形で僕と一夏に向いている。その

せいで先生の爽やかな挨拶も女子一同はガン無視中。

あーあ、先生の顔が微笑のカタチで固まってるじゃないか。彼女もまた被害者の一人であることは間違い無いと思う。

先生正直すんませんでした、これは総て篠ノ之束って人のせいなんです。だが彼女は謝らない。

「た、担任の山田真耶です！皆さんよろしくお願ひしますね！」

「……………（あれが世界初の男性操縦者なのね…）」

「……………（そしてもう一人が篠ノ之博士が直接目にかけてるっていう男の子）」

「……………（わたくしはどう動くべきでしょうか）」

「……………（一夏…）」

先生が頑張つて二の句を告いでも、一同は華麗にスルー…あ、先生がもはや涙目だ。

なんとというか、普通に申し訳ないのでここは助け舟を出すことにしよう。

えーと、とりあえず原作ネタでお茶を濁すかな？こういう時転生してるのって便利だ。…致命的に使い方が間違っている気がするけど。

「へえそうなんですかー。反対側から読んでも『ヤマダマヤ』なんですねー、アハハー（棒読み）」

「……！……」

「そ、そうなんですよ！先生昔随分からかわれちゃいましたっ！あ、せ、先生も自分のこと言いましたし、それでは生徒の皆さんも自己紹介も願ひします！」

やべえ棒読みすぎた。ふいー、危なかったぞ僕。一応なんとか先生も場の流れを取り戻せたようでは何よりだね。

『ありがとう！本当にありがとう！』と口パクで何度も僕に頷く先生。いや、美人に涙目の笑顔でお礼を言われるなんて嬉しいなあ。しかし先生、そんなに首を動かすと胸部の兵器が上下にぼいんぼいんして目の毒なので止めたほうがいいと思いますよ？

どうでもいいけど、巨乳はやはり人類の宝だと思う。どうでもいいけど。

「「「……………」」」

じーっ。

…しかし、今の行動の対価として一夏に向けられていた視線が一気に僕に切り替わった気がする…！早まったか…！！

「 ……です。よろしくお願いします…」
「 はい、それでは次に、オルコットさん」
「 ふふっ…わたくしの番ですわね？セシリア・オルコット、代表候補生ですわっ！」

そんなわけで、気を取り直して自己紹介。

現在ドヤ顔なのがイギリスの代表候補セシリア・オルコット、通称ちよろいさん。最初ツンツンだったのに一夏に一瞬でデレたあたりが名前の由来である。

僕の前世の知識通りなら、彼女はこれから一夏とケンカに遭ってヒロインの一人になるはずだ。なんというか、話の都合で彼女のデレるスピードは異常に早かった。

とはいえ彼女のフォローのために言わせてもらうと、これは一夏の女子を落とす技術のせいでもあると思う。隣で見てて思うけど、尋常じゃないモテっぷりだからね一夏も。

やれやれ、今まで何回あの朴念仁に女子がオトされたことやら…主人公つてのは本当に凄いと思う（いろんな意味で）。

でも正直、双子の兄（僕）を巻き込んだりするのは止めてほしい。

「はい、それは次に…織斑一夏くん…弟のほうの織斑くんです。お願いします」

あ、次は一夏の番か。噂をすればだ。

なんととはなしに隣にいる一夏のほうを向いてみる（ちなみに僕と一夏の席は中央最前列だ）。このフラグ男はいつたいどんな自己紹介をするんだろうか？原作通りだと正直面白くないので何かしらのネタを期待したいところだ。

「…………… かんは…によって…用化され……………」

…ん？独り言？

「？織斑くん？」

「おーい、一夏？」

返事がない。どうしたんだろうか、と思い下を向いている一夏の
手元を覗き込んでみると、

「…………… エネルギー系統の兵器と実弾兵器はやはり現在もほぼ同程
度の能力でありそれぞれの特性を理解して把握しておくことが必要
ぶつぶつぶつ……………」

「……………」

…一夏、まだ必死こいて予習してたのか。気づきなよ山田先生に。
どれだけ没入してるのさ。

本当に何やってるんだろこのバカは…まさか自己紹介以前にツ
ッコミ所を用意するとは思わなかった。多少僕のせいだけど。
まあ、とりあえず。

「姉さん、よろしくね」

「ここでは織斑先生と呼べ。さて 自己紹介くらい、ちゃんと
しろ馬鹿者」

ゴパン！

「つづがぶつぶべッ!?!」

IS学園恒例・出席簿攻撃は無駄を生じぬ二段構えである。振り

下ろされた一撃と、机に顔をぶつける姿は非常に痛そうでした。いやー、僕はああいうのを防御できるチートを貰っておいてよかったよ。

「ち、千冬姉…！？なんでここに居るんだ！？」

「『織斑先生』だ。いいからさっさと自己紹介をしろ」

「ご、ごめんね織斑くん大丈夫…？い、いまクラスの皆で自己紹介してて、それで織斑くんの番が来たから、ね？」

「え、ええマジですかもう始まったのか…！？ていうか、いきなりそんなことを言われても俺無理で」

「次は零夏に出席簿を持たせるぞ」

「それだけは勘弁して下さいッ！！織斑一夏ですよろしくお願いします！！」

待つんだ2人と。いくら僕の筋力が人類最強だからと言って、そのやり取りはやめてほしい。まるで僕が出席簿を持ったら一夏が死んでしまうかのようなリアクションじゃないか。本気でやればそうなるんだけども。

一夏が顔を青ざめさせてガタガタ震えているあたりがまた信憑性を与えているらしく、クラスメイトに『えっ、織斑（兄）くんってどんだけ怖い人なの！？』的な目で見られてるよ僕。

「さて…すまなかつたな、山田先生。身内が迷惑をかけた」

「い、いえそんなことは！零夏くんのほうは、私にフォローもしてくれましたし…」

「ほう、そうか。まあ多少は本人のせいでもあるしな」

いえ、それは明らかにウサギさんのせいだと思います。

僕のぼっちフラグを立てつつ、しかし姉さんはこれを敢えてスル
ー…！なんてこつたい遊ばれている…！！圧倒的遊戯…！！

まあ、肉体的には僕のほうが強いから姉さんはたまにこのような
コミュニケーションを取るんだけどね。そういう所はやっぱり束さ
んと似ているんじゃないのかな？類は友を呼ぶというやつか。

「なら丁度いいな。零夏、お前も自己紹介しろ」

「えっ」

「丁度お前の順番だ、問題はないだろう？」

いやいや姉さん。物事にはタイミングっていうものがあるでしょ
う？ハードルを上げておいてそれはないと思うんだ。

抗議の視線を送ってみたが不敵な笑みで返された。ひよっとする
と束さんと同列に扱われた仕返しかもしれない。心を読むあたりも
似てるんだけどね。

え、えーと…しかし、どうすればいいんだろう？この状況。とり
あえず席を立ってみると一部の女子がビクッ！と動いた。なんか危
ない人扱いされてて悲しい。

「…えー、皆さんウサギさんのせいでご存知だと思いますが、織斑
零夏です。一夏とは双子で、僕が兄ですね。趣味は普通に漫画とか
読んでます」

とりあえず普通に自己紹介を言ってみたものの…や、やばい！』

とりあえずさっきの千冬様の発言について詳しく教えてください！
的な視線が痛い！！

こ、この後僕は何を言えばいいのさ！？この状況で好きな食べ物とか言っても多分フォローにならない！しかしフォローしないとクラス内で危険人物扱いされる！

いくらチートがあってもこういう状況にはてんで弱い僕である。
仕方ないでしょ！前世はコミュ障だったんだよ僕！と、とにかく何かを言わなきゃマズイ　ええとアレだ！こういう時にはネタに走るか！？ネタって何を言えばいいんだよもう！！

「なんだ、それだけか？お前にはもっと言つべき特徴があるだろう？」

「え？織斑先生、それはどういう…？」

「山田先生も知っているはずだ。なにせ、とある馬鹿者が全国に堂々と放映したからな」

混乱している僕を見て、楽しそうに姉さんが言う。

いや、僕だつてソレを言えばフォローになることは分かってるよ！でもあんなこと自分の口から言いたくないってば！

「まあいい、なら私が言うだけだな」

「ちよっ：姉さん！？流石にその落とし方は酷くない！？」

「先生と呼べ。：さて諸君、君達の知っているが、コイツが私の弟であり、世界で2人目のIS男性操縦者であり、そして　」

「 世界初の、『形を持たないIS』の持ち主だ」

（いや、実はそれ嘘なんだよねー）

言うタイミングを完全に逃しちゃったけど、いつ説明できるんだ
ろうか、これ。

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（後書き）

説明回ですみません。

さつさと女の子と主人公を喋らせたいです。ヒロイン未定とは書きましたが精神年齢的にも年上組が絡ませやすいかも。特に山田先生と束さん。

チートが何なのかは次回詳細説明ッ！！

それと、まだ第一話なのに日刊ランキングに載っていました。ありがとうございます、これから宜しく願います。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く(前書き)

この作品の原作はISです。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く

大英雄ヘラクレス。

英雄としては抜群の知名度を誇っているその存在を、僕はとあるゲームの中で知った。

『 バーサーカーは、強いね』

生まれた瞬間から死を決定づけられた白い少女。

彼はその少女を主として現代に蘇り、とある『戦争』に挑むことになる。

しかし、彼はその肉体を強化するために、『狂戦士』という位階を与えられ、かつての人生でそうであったように 狂気の呪いを身に受けた。

絶大な力と共に、彼はまたもや理性を奪われたのだ。

結論から言ってしまうえば、それは恐らく失敗だった。

あるいは理性があれば、生死を共にした武器さえあれば、彼は敗北しなかったかもしれない。少女を守り、救えたかもしれない。泥にまみれて、黒く染まることもなかったかもしれない。

けれど。

言葉はない。理性すらない。
幾多の敵を屠った、無双の技術も振るえない。

それでも、彼は戦い続けた。

愚直なまでに戦うことしか知らず、幾多の試練が道を塞いでもその身が滅びるまで、彼は決して止まらなかった。言葉がなくても、彼は確かに、その身の全てで語っていた。

『少女を守る』、と。

その姿を、僕は心の底から尊敬する。

どれだけの苦難も、危険も、脅威も、傷も、死ですらも、全て彼は受け止めた。誰よりも死に近く、誰よりも死ぬことの恐ろしさを知っているのに、彼はそれでも戦い続けたのだ。

いやはや、真似できる気がしないよまったく……まあ、だからこそ彼は『英雄』なんだろうけどね？僕は別にそんなものにならなくていい。

ならなくて、いいけれど。

もし叶うなら。

ほんの少しだけでいいから、彼のようになってみたいと思ったんだ。

生前、数多くの試練を越えて、その分だけ彼の肉体は強くなつていった。

そして 全ての試練を越えた彼の肉体はついに、ひとつの『鎧』として成立するほどとなった。それから先、『神秘』を持たたその鎧は、多くの傷から彼を守り続けたという。

その神秘の名を

『ゴットハンド十二の試練』、と呼ぶ。

『いや、この鎧がまた凄い性能でしてね。彼が越えた十二の試練の数だけ死んでも蘇生して、なおかつアツチの世界の定義でBランク以下の攻撃を無効化するんですよ』

『ふーん。なんていうか、れーくんは設定に酔いまくるタイプなんだね!』

『機械設定に酔いまくるアンタにだけは言われたくないわ!』

『あ、そういえばそうだね! いやあまたれーくんとの共通点を束さん見つけちゃったよ!』

『怒らせてよ! 開き直られると僕どうすりゃいいのさ!』

なーんて会話を束さんとしていた僕だったりする。

転生をぶつちやけた以降、僕は妙に束さんに懐かれた。

あの時を境に、突然ふらりとやってきて、れーくんのこと教えてーだの一緒に寝ようよーとか言われながら抱きつかれるだのされるようになったんだよね。ちなみに僕が断ると姉さんのところに行つて抱きつき、アイアンクローを食らつてまた僕のところに戻つてくる。無限ループって怖くない？

…これが一夏なら何も気付かずに対応するんだろうけど、僕はそこまでニブチンじゃないので『あれ？なんか妙なフラグ立てちゃった？』とか思ったよ。まあでも、どうも無害っぽいので当時は放置することにしちゃったんだ。

どうせ『十二の試練』^{ユッドハンテ}があるから物理的には大丈夫だし、いざとなったら姉さんを頼ればいいやーとか思ってたんだよね。

…今思うと、この選択がそもそも間違っていた。『おっぱい柔らかいぜイヤッホウ！』とか考えてた当時の僕を宝具で三回くらいブツ殺してやりたい。

そんなわけでグダグダに過ごしていた僕の運命が動いたのはその随分後、一夏がISを起動させちゃった時である。

「そう、それですよお兄さま！私たちはその話が一番聞きたいんですッ！」

「さあさあキリキリ吐いちゃいましょうよ！！」

「いやいや君達急に態度変わったね！その変わり身に驚きを隠せないよ！！」

「アハハ、大人気だな零夏！」

「黙れ小僧！」

自分に対する視線の量が減ったからって僕を煽るんじゃない一夏！なんなら姉さんに出席簿を借りてきても　あ、ごめん冗談だから。そんなにガタガタされると僕もマジでへこむからやめて欲しい。

さて、現在は休み時間である。

姉さんのぶっちゃけトークの直後ということもあり、僕のもとにはクラスメイトが殺到して質問攻めに遭っている状況だ。

さっきまで危険人物扱いしてたのに…好奇心にはやはり勝てないということなのだろうか？いやまあ勿論ああいう目で見られるよりはマシだけどね…

「で、お兄さま！そもそも篠ノ之博士とはどういう関係なんですか！？」

「いや普通に近所のお姉さんみたいな感じだけど…というか『お兄さま』って何さ」

「いや、なんだか織斑くんって年上オーラが漂ってきますからつい…そういうところは千冬様にけっこう似てますよね？」

「確かにそれは良く言われるけれどその呼び方はどうなのさ…」

転生者だからね。精神年齢が上なのは事実だからそう思われるのも仕方ない。加えて、ヘラクレスの能力のせいで身体はしっかり筋肉ついているのも年上扱いされる要因なんだろうなあ。

…でもさ、流石に僕もクラスメイトに『お兄さま』なんて呼ばれることになるとは思わなかったよ。

これが弾あたりに知られたら僕はマジギレされて殴りかかられるかもしれない。効かないけど。

「とはいえ同い年なんだから別に敬語なんていらナイよ？」

「い、いえっ！と、特に意味があるわけではないのでお気になさらずッ！！」

「偉い人は言いました！『LESSON4 敬意を払え』と！」

「漫画じゃん！というか君達やつぱり怖がってるよね僕のこと！？」

「ひいっ！？ご、ごめんなさいいいい！！」

「なんか反応がガチですごい傷つくよ！どうしてこうなった！！」

「ま、まあ落ち着けて皆。零夏は確かに異常な強さだけど、それは東さんのISのせいだって知ってるだろ？」

流石に引け目を感じたのか、一夏が空気を読んでフォローを入れてくる。

確かに僕がドン引きされた原因のひとつは一夏のリアクションなわけだけど　でもそれ、ISのせいじゃないんだよ一夏。

「あ、ああそうそう『形のないIS』についても聞きたかったんですよお兄さん！」

「織斑（弟）くんのリアクションは、『こっそりISを起動して攻撃できるから』なんですすよね！？決して素で頭を吹き飛ばせる能力を持つてるわけじゃないですよね！？」

「え、えーと…うん、そういうことになる…ね？」

「…」「良かったあああああ…！！」「」「」

…実は頭を吹っ飛ばすどころか、衝撃波で全身をバラバラにするくらいの力は持つてるんだけど、この流れだと真実がものすごく言いづらい。ごめんなさい、今僕はウソをつきました。

はあ、まいったなあ…こうして僕は束さんの策略にハマッていくのか…これだと誤解を解こうにも解けないじゃないか。そもそも、束さんがああいう真似をするから僕が色々勘違いされることになったんだよ。

うん、折角だからその時の様子を思い返してみよう。はい回想シーンはこちら。

『結局、一夏はISを起動したけど僕はなーんもなかったなあ…よかったよかった』

『やれやれ、薄情なことだな。弟がISを起動させたというのに』
『むしろ向き合い方を変えないところを褒めてほしいよ姉さん。…あー、平和なメシは美味しいなあ』

その時僕は、僕はお菓子を食べながら自宅の居間でグダグダしてる最中だった。

ちなみに一人ではなく、たまたま休日だった姉さんも寝転びながら酒を飲んでいるところである。

『ブリュンヒルデが酒を飲む』とか書くと絵画のワンシーンのよう

に聞こえるけど、実際飲んでいるのは缶ビール…一気に俗っぽくなつたね。仕方ないね。

『落ち着いたものだ…お前はまさか、束から何か聞いてたんじゃないだろうな？』

『あつはつは、それは無いって。というか聞いてもわからないですよどうせ…って姉さん、僕のポテチ取らないでよ』

『このくらいはいいだろう、たかだか一枚だ…というか、相変わらず食う量が多すぎないかお前は』

『姉さんこそビール七本目は多すぎるんじゃないかな？』

『このところ忙しかったからな。今日一日はゆっくりさせる』

『まあ、IS学園の教師なら仕方ないか…まったく、いつあんなところに就職してたのやら』

あ、ちなみに僕は身体の都合かやけに大食らいな体質である。漫画とかでよく大食いキャラがメシ屋を荒らしたりするけど、まさか自分でやるとは思ってもみなかったね。

今もポテチ（大型）を三袋目を開けたところだ。ちなみに飲み物は普通にコーラだけど、これも2リットルの3本目。それなのに特に太る様子もなさそうなので世の女子を敵に回しそうだ。

『…いやーしかし、のんびりするのはやっぱいいね』

チートなんて使わないに限るよ。色々バレたりこっそり使ったりしたことあったけど、人生危険とは無縁なところでゆっくりしているのが一番さ。こうして姉と寝転び無駄な時間を過ごすことは非常に幸せなことだ。平和万歳。

そういえば、今頃一夏はどうしてるかな？そろそろアイツは家に

帰ってこれるんかねえ…あ、ニューズ見ればすぐわかるか。何しろ最近は『世界初の男性IS操縦者』で持ちきりだからねえ。

姉さん、TVつけてー。え、面倒だから自分でやれ？なんだよケチだなあ…まあいいか、リモコンリモコンっと。

ピッ

『【いえーいちーちゃん！篝ちゃん見てるー！？織斑零夏ー！通称れーくん見てるかーい！！】』
『ぶふウツツ　　！？』

思わずコーラ吹いた僕を許してほしい。

脈絡もなく突然TVに知り合いが映ったら貴女はどう思いますか？それがたとえ世界を変えた天才であっても、僕なら正直超ビックリすると思います。というか今まさに驚愕の最中だ。

『ゲホガホ…た、東さん！？』

『……零夏、TVを今すぐ消せ。今日は休日だからな』

『え、スルーすんのこれを！？』

『【おっと待ったちーちゃんその扱いはないと思うな！わざわざTVの全チャンネルをハックした東さんの手腕を褒めるところだよこは！ー！】』

『アンタ今リアルタイムでここを見てるだろ！ナゼミテルンデス！』
『？』

って待て！今さりげなく束さんがとんでもないこと言ったよね！
これ今全国で放映されてるのかよ！僕の名前も思いつきり今放映中
なの！？

高校受験も無事に終わらせて平和を満喫してたのに何をやらせる
気さー！あ、ちなみに学費の安いところをサクッと推薦で通りまし
た。みんな、勉強しておくのは大事だぜ。

やばい、なんか脳内がちよつとづつ現実逃避を始めている。嫌な
予感しかしないよ…！僕の前世までの経験やら英雄の危機察知能力
が叫びまくってるよちくしょう！

『そんなわけで僕はTVを消すぞジョジョオー！ってあれ、消えな
いし！なんで！？』

『ふつふつふ。れーくん甘いね！束さんの魔の手から絶対に逃れ
られないよ！』

『アンタうちの家庭に何か色々仕込みまくってるだろう！というか
さつきから微妙に危ないネタ混ぜるのやめなさい女の子なんだから
！…！』

『…何をする気だ束…ここまで大掛かりな真似をしている時点で、
既に色々問題は出ているだろう』

『ぶー。束さんは悪くないよ？そもそもこんな真似をしたのはい
つまでたつてもれーくんがノーリアクションだったのが原因だもん
』

『？一体何を言って…』

『【さーて世界中の皆さん束さんのニュース速報だよ！なんといつ

くんのお兄さんのねーくんもISに乗れることが判明しました！！』

えっ。

いや、乗れませんが。

『【いやーあの時はビックリしたね！なぜか東さんの極秘開発してたISに適合したんだよ！せっかくだからどーんとそのままプレゼント　　】』

そんなものを貰った覚えは無い…というか、東さんの言いたいことがわかりかけてきたぞ？

彼女はどうかやら、僕のことをIS操縦者の仕立て上げたらしい。…いやいや、やめてよ！東さんのことだからIS学園に放りこんだら面白そうだなーとか考えてるんだろうけど僕バトル展開とかダメなんだってば！

は、いや待て。冷静に考えると僕がISを使えないのは本当だし、何か言われてもラファールだの打鉄だのを触って『ほら動かないでしょ？』とか言えばいいだけ

『【　　】　　したのがかれこれ数年前だよ！凄いでしょねーくん！バズに色々仕込んだ東さんの手際をほめてほめて！』

『アンタ何やってんだあああああ！！？』

『【いやはや、東さんもいい仕事をしたよ！あ、ちなみに絶対安全なようにねーくん以外には起動できないようにしておいたから！まあそのせいで他のISに反応しない変なバグが出たけどたぶん大丈夫なんじゃないかな！！』』

『開発者のくせに何故そんなに適当なんだ…』』

それはね姉さん、そもそも僕的能力はISじゃないからさ。興味が無いからたぶん投げっぱなしなんだろう。そもそも作り話だし。…というかこれ、完全に逃げ道が塞がれているんじゃないか!?

『…おい、零夏。とりあえず持ち物を確かめる、今の話が本当なら待機形態のISがあるはずだ』

『【ああ、ダメだよちーちゃん。その方法じゃ見つからないから】』
『なに…?』

『【なにせそのISは　世界初、形のないIS】なんだからね!!--!』』

とまあ、これがTVで壮大に放映された内容である。

篠ノ之博士直々にTVをジャックして発表された内容だけにかかなりの信憑性だったらしく、その後僕はなんやかんやで日本政府に呼ばれ　IS学園に転入のコンボを食らってしまったのであった。

くそう、あの時点ではまだフォローができた範囲だったのに…学園の転入試験でつい相手をボコしてしまったのが間違いだったんだ…!

「とはいえ、そのISの詳細はぜんぜん説明されてないよな」

「あー、そういえばそうだねえ」

そもそも一夏も僕のことを知ったのはごく最近だし、戦闘シーンを見たのは姉さんと一部の相手だけだ。詳細に至っては束さんです

ら完全には知らない。まさしく謎に包まれたISに見えているに違いない。

「ねえねえ、よかったら教えてくれませんか？クラスメイトのよしみということで！」

「えー、あー…？どうしようかなあ」

「えー、勿体ぶらずにささっと教えて」

と、名も知らないクラスメイトが僕を急かそうとした瞬間

「ちよつと、いいか？」

「ちよつと、よろしくて？」

「「え？」」

2人の少女の声が重なった。

僕と一夏がその声のする方を向いてみると、

黒髪の少女が、一夏のもとに。

金髪の少女が、僕のもとに。

様々な想いをその胸に込めて、目の前に立っていた。

かくして、物語は始まる。

しかし、それが台本通りに進むかどうかは、まだ誰も知らない。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く（後書き）

ヒャッハア！何故ランキング五位とかに乗ってるんですかね！プレッシャーで潰れる！潰れる！

いやはや予想外の評価に驚きですね。皆さんありがとうございました！

本文のうんちく。

英雄ヘラクレスはゼウス神さんとその愛人的な人（？）との子なのですが、ゼウス神の奥さんであるヘーラーさんという方はヘラクレスを酷く憎んだそうです。

ヘラクレスが狂気に満ちたのはこのヘーラーさんが吹き込んだせいのようにですね。Fateの本編を考えるとなんとも皮肉なものです。ぶっちゃけヘラクレスって狂気が無ければマジで対抗できるのは本気のギルくらいしか居ないそうです。気の毒に…

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず（前書き）

セシリアさんとダベツてたら終わってしまった…

このままだとアレなのでこの後L i f e 4を連続投稿します。

しばらく後で、しかも短めになると思いますがお待ちください。

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず

セシリア・オルコットの気分を一言で表すなら、彼女はひどく不満だった。

ISが開発されてからの十年で、世界がその形を変えたことは記憶に新しい。

その中で最も顕著な変化は、男性の地位が下がり、女性の地位が上昇したことにより女尊男卑となったことだろう。街の一角で女性が男性を使い走りに使う程度のこととは、今では世界中に溢れてしまっている。

記憶に蘇るのは、ただ母の言うことを聞くことしかなかった父の姿。

セシリアにとって男というものは、自分の意志すら表に出せない情けない存在でしかなかった。

プライドもなく、全てを諦めてしまっている姿はとても、とても彼女には我慢できないもので、いつしか彼女は男性というものが心底嫌いになった。

だから、自分はあはなるまいと彼女は努力を重ね ついに
は、イギリスの代表候補生にまで成長する。

家族の名に恥じないように。

自分の誇りを裏切らないために。

そして、彼女はまだ歩みを止めることはない。

(わたくしは、もっと、もっと 強くなります)

あんな『弱い』男達とは違うのだと、証明するために。

それが変わったのはごく最近のことだ。

世界初のIS男性操縦者の登場　それを聞いて、世界の誰もが驚いた。

セシリアもそれは変わらない。しかし他と違う、代表候補生という立場の彼女は、こつも思っただのだ。

ひよつとしたら、その男は、自分が知らない『強い男』なのかもしれない。

そんなかすかな希望はしかし、数日後にとあるニュースで揺れ動くことになる。

『形のないIS』を動かした、とある少年の登場によって。

「頑張るんだモッピー！僕は君のことを全力で応援してるぞっ！！」
「その名で呼ぶなこの馬鹿者があああっ！！」
「貴方、わたくしのお話を聞く気がありますのおおおおおおッ！！？」

「やあ、ようこそIS学園へ。この出席簿はサービスだから落ち着いて受け取って欲しい。」

「うん、すまない。メインヒロインの出番は『カット』なんだ。謝って許してもらえとは思ってない。でも、確かに彼女はここに居てしっかりと一夏をイベントをこなしているからそこは安心してほしい。」

「彼女の魅力を知りたいなら原作を読もう。じゃあ、この叫んでる子に意識を戻そうか。」

「なーんてメタ発言満載のことを思いながら、僕は今こめかみに青筋を立てながらこっちを睨んでいる金髪さんの方に向き直る。」

「え、結局篝ちゃんはどうしたのかって？今一夏と屋上行っちゃったよ？束さんのこともあつてか僕はあの子にあんまり好かれていないんだよー。」

「だからまあ、とりあえず一夏とのアイコンタクトによる協議の結果、オルコットさんのことは僕が引き受けて、一夏には篝ちゃんを任せることにした。」

「どうせ次の時間には一夏もオルコットさんに色々言ったり言われたりするんだ、これくらいが妥当だろう。しかし一夏は休み時間ごとにはフラグを立てる作業を行ってるなあ……」

「（……ビキビキッ！）」

「と、いい加減オルコットさんが僕に殴りかかってきそうなので謝っておくことにしよう。流石に三分ぐらいスルーし続けていたらこくなるよね。」

「いやあ、ごめんねオルコットさん無視しちゃって。あの子とは数年ぶりに会ったからさ、挨拶くらいはしておこうと思って。」

「明らかに彼女を煽るためだけにやってみましたわよねえ！？人が真面目な話をしようとしている時にそんな態度を取って恥ずかしくないんですの！？」

と、言われましても。

この後一夏に『この私と話せて光栄だと思いませんの！？』とか言う人が言えるセリフじゃないよねえそれ。女尊男卑とはいえモラルの問題は大事だと思うよオルコットさん。まあ、僕がそんなこと言えた義理じゃないんだけど。

…それにしてもこの子、からかうと非常に面白いな。今後ともちよくちよく遊ぶのもいいかもしれない。レイカは楽しそうだといやっちゃんだ。レイカ知ってるよ、セシリアはちよろくてえろい女子なんだってこと。

「この…ッ…ふ、ふう。まあいいですわ、それよりも貴方には聞きたいことがありますもの」

「ん、なんだい？」

「本当は織斑一夏のほうにも聞いておきたかったですけど」

おや、切り替えの早さは流石代表候補生と言ったところだろうか。まあ煽ったのは僕なんだけどね。正直すまんかった。

ほら、僕って精神年齢が上だからさ、年下で遊びたくなることがたまにあるんだよ。姉さんも東さんもよくやるアレさ。これはたまにバカやりたくなる病気みたいなものだからね、仕方ないね。

そんなくだらないことを考えていた思考は、彼女の次の言葉で一気に冷却されることになった。

「貴方にとって、ISとは何ですか？」

その質問は、僕にとって避けられない言葉だったと思う。

『形のないIS』について、周囲に知られている情報はあまりにも少ないが、それを全て並べるならば、以下の通りになる。

ひとつ そのISには、形がない。

装甲はない。それどころか、待機形態すら存在しない。ISに存在する様々な出力装置を小型化したのか、透明にしたのか、はたまた肉体の中に仕込んだのか、『それら全てが一切不明』であり、防御は全て不可視のエネルギーシールド すなわち、『絶対防御』のみで行う。

故に、パッケージの換装や、武装の変更などは不可能。今の世界で主流となる『あらゆる目的に適應する』ことに真つ向から逆らう、『最強の一』を求めたIS。

ひとつ そのISは、飛行能力を持たない。

他の全てのISが持っている、空を、宇宙を飛ぶための翼が、それには無い。

宇宙空間での使用を前提にしているはずなのに、その機能をオミットし、その代わりに、他の全ての現行機を超越する出力を持つIS。

ひとつ　そのISは取り外せない。

すなわち、調査不能、解析不能、そして制御不能なIS。

その機体を使えるのはただ一人だけ。すなわち　この僕、織斑零夏『のみ』にしか扱えないのである。

…とまあ、これらが僕の能力の概要。

そういうわけで、これらの力を持っている僕の背中には、とんでもない責任がのしかかっているわけだ。

『形のないIS』を持っていることの異常性はそれだけでは済まない。なにせ隠密製に特化しているのにパワー最強、現行ISとは別ベクトルで集約された技術力。どれも価値があるというだけの一言では済ませられないレベルだ。

おまけにこのISは東さんお手製の『どの国にも所属していない機体ということになっているので法的な拘束も難しく、同時に、あらゆる国が引き入れることに躍起になっている存在でもある。

だから、僕はいつか問われるだろうと思っていた。

ただの1学生のお前が何故、いきなりそんな力を手に入れられるんだ。

お前は、我々の努力をなんだと思っているんだ、と。

「…なんで、そんなことを聞くんだい？」
「わたくしは、代表候補生ですから」

思考に区切りをつける。

とりあえず、彼女の質問に回答するには保留して、こちらからも問い返して情報を得ることにしよう。質問を質問で返すのはよくないがまあ仕方がない。

「代表候補生というのは、そう簡単になれるものではありませんでした。座学も、実習も、実戦も…わたくしは他人よりも努力して、だからこそ今の居場所に居ます」

「だから、いきなり専用機を渡された僕が気に入らないと？」
「それもありますが…正直な話、貴方と織斑一夏はモルモットのようなものでもあります。それだけならばわたくしもこんなことを聞きはしません」

オルコットさんの真面目な雰囲気を感じてか、周りのクラスメイ

トは沈黙を保つたままだ。空気が張りつめて少し息苦しい中、僕と彼女は会話を続ける。

…モルモット、というのは確かにそうだ。力を手にするかわりに、他人からの視線は否応なく突き刺さってくる。何かを得るためには同等の対価が必要だ、というのはある程度確信を突いた言葉ではあるよね。

無言で先を促す僕に、彼女は問う。女性として、代表候補生として、IS操縦者という努力をした者の代表として、僕に言う。

「わたくしが聞きたいのは 貴方達のISは結局、篠ノ之博士の都合で『渡された』ものでしかないのではないか、ということですよ」

それが彼女の不満の理由だった。

東さんの都合。そう考えるのは大勢の人にとって極めて自然な流れだ。

ISの『製作者』 篠ノ之束。

世界最強の『ブリュンヒルデ』 織斑千冬。

世界初の男性操縦者 織斑一夏。

僕のまわりには、こんなにもISの重要人物が溢れている。故に、あらゆる人が思っただろう。織斑零夏は、ひよっとしたら織斑一夏も、

篠ノ之束に『選ばれたから』ISに乗れたのではないかと。

彼女が求めているのは強い男性だ。だから、こんなにも『都合よく』織斑の関係者だけがISに乗ることができているのが気に入らない。

ひよっとしたら、僕達はただのエコ贖罪でISに乗れているだけではないのか？

結局は強い男性など居らず、ただ女性に力を与えられているだけではないのか？

そう、彼女は『不満』を…あるいは『不安』を抱いている、ということだろう。

「そこでISをどう思っているか、に戻るわけだね」

「…そうですね」

何を思っているか。どう受けとめているか。力が手に入ったと喜んでいるのか、こんなものは必要ないと憤っているのか。

そんな僕の様子から、彼女は男性というものがどういうものなのかを推し量ろうとしているのだろう。

はてさて。一体僕はこの問いにどう返すべきなんだろうね？

様々な回答が脳裏に浮かんでくる。僕はその中から自分の選ぶべき言葉を捜そうとして やめた。

…考えるまでもないことだったね。

「身体の一部だよ」

「…え？な、なんですって？」

「意味がわからないだろう？ああ、これはISのことを大切に思っ
て言っているわけじゃない。正真正銘、僕にとって『これ』は『身
体の一部』でしかないんだよ」

「な　何を言ってるんですの、貴方は！？　ISには自己進化を促すコアが搭載されています、そんなことすら知りませんか！？」

知っているさ、そんなことは。

だからこそ、僕はこう答えているんだから。

「…『これ』を君たちがどう捉えているかなんて僕にわかるわけがない。だってそもそも、僕にとっての『IS』と君たちにとっての『IS』は別のものなんだから」

「そ、それはどういう意味ですの！？」

「説明してもわからないさ。僕が君の言葉をわからないようにね」「な、何を…」

僕が返すべき回答。それは

……。

そんなもの、あるわけが無いッ！

大体、束さんの大嘘を信じているオルコットさんの真面目な話を、僕が真面目に返していいはずもないだろうに。そもそも、僕はISに乗れないんだからそんな文句を言われるのはお門違いだよ！

そういうのは『本当にISに乗れる奴』に言うべき文句でしょうに。僕は違います、人違いです！

噂でバカにされるくらいは我慢してあげるから、君は本当に文句を言うべき相手に言えればいいんだ。

「だけどもあ、君の文句も一応スジが通ってるから、ヒントくらいはあげよう」

「ちよっとお待ちになりなさい！話はまだ終わって

「一夏と向き合えば、答えは出るよ」

「！！」

そう、考えるまでもない話なんだ。

ヒロインには主人公を当てればいいだけの話さ。

ISの誇りとか僕は知らないよそんなこと。『英雄』の誇りの話なら真面目に対応するけど、男の操縦者うんぬんな話題に関しては全部一夏に言いなさい。どうしても僕に文句が言いたいなら束さんを連れてきて一緒に怒るべきだね！

というわけで、僕は彼女の怒りを全部一夏に丸投げすることにした。うん、それが妥当なことだと思う。そもそも、僕は本来いないはずなんだから、このくらい許されるだろう。多分。

だから、僕は彼女に言ってる。

「君に答えを出すのは僕の役目じゃない。一夏の役目だよ」

そう、彼女に告げた瞬間。

キーンコーンカーンコーン。

「「あ」

かつこよく決め台詞を発した瞬間にチャイムが鳴った。なんとなく狙ったようなタイミングだろうか。いやはや、チャイムとセリフがかぶったら僕恥ずかしくて死んでたね。厨二病とかいうレベル

じゃなかったよ。

今の音で硬直が解けたのか、わたわたとクラスメイトが座席に戻っていく。次の授業の準備もしておかないと出席簿が飛んでくるだろうからねえ。教材がめっちゃ厚いのもあって面倒だね、仕方ないね。

「く、この…っ！あ、後で弟さんと一緒にまたお話を伺いますからねっ…！」

そう言い残してオルコツトさんは去っていった。

ああ、申し訳ないけど僕、次の休み時間は男子トイレ搜索の旅に出なきゃいけないからその要望には応えられそうにないや。実は原作で『男子トイレじゃないんじゃない？』疑惑があったから割とマジで探しておかないとやばい。

…っていうか、あるよね？男子2人になったしトイレくらいあるよね？用務員のおじさんも居るらしいし、頼むからあると言ってくれ　　ッ…！

「ん、どうしたんだ零夏？へんな顔して」

ちなみにその後、どうやらよっぽど焦っていたらしく、戻ってきた一夏にそんなことを言われてしまった。はっはっは、一夏も気付いたら似たような顔になるぞ。

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず（後書き）

本文を見返すとただかつこいいだけの空気を匂わせていたアホだったので修正しました。

補足しますと、

そもそも零夏は文中で言っている通りISには乗れません。

故に、嘘のせいで自分が色々言われているのことに對して、なんでわざわざ自分が返答する必要があるんだ、と彼は考えています。

また同時に、ウソを自分で受け入れて彼女の望むような回答を出すことも不誠実だというのが零夏の思考ですね。

という事を書いていたつもりが、訂正前はただのかつこ良い空気を出しているだけのアホでした。作者の顔は真っ赤です。

こつという点からさりげなく、『IS』と零夏の『異能』には決定的な断絶が広がってるんだ、なーんてことをアピールしてみたり。

さて、次のあとがきでは忘れそうなので書いておきますが、僕はリアル生活の方では風邪をひいてしまいました。

皆さんも体調管理にはお気をつけてください。寒いのはヤバいです。さて、その分を取り戻すためにも次を書くぞー。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（前書き）

前話を修正しました。

色々ミスがあったのです…：なんとというか、自分の伝えようとしていたことが書いてみると意味不明なことってよくありますよね…

というか短いはずだったのに過去最長だよ！一体どういうことなんだ！もう朝チュンの音が聞こえてるわ！

推敲は申し訳ありませんが昼頃になると思います…：誤字や意味不明な部分等あつたらすみません。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

時は流れて、現在三時間目の頭である。

結局次の休み時間をトイレ搜索に費やした僕は、教室に帰ってからオルコットさんにキツ！と睨みつけられるという流れを経て座席に座っていた。あ、ちなみにトイレはきちんと見つかりました。よかったですよかったです。

実は二時間目、山田先生がぼろつと『ISはブラジャーに関連してますよね』なんて話をして、またもやクラスメイトの視線を釘付けにした事件等があったけど割愛させてもらうよ。原作通りだったし。

ちなみに僕の目は恥ずかしくて胸を押さえた山田先生の、寄せ上げられた巨乳に釘付けでした。男だもの仕方ないでしょう…その後姉さんに出席簿攻撃を食らったけど、僕に悔いは無い。痛くないし。

「クラス対抗戦とか代表つて、要するにそのまんまの意味ですよね？」

「ああ、そつだ。付け加えるなら、代表者は今後もクラス長扱いで一年間は変更無しになる」

で、今の状況は姉さんの思い出すような発言に対して一夏が手を上げ、それに姉さんが応えたところである。

いやーそれにしてもすごいよ一夏、原作より頭いいね！原作だと

代表候補生の意味もわかってなかったからね！これもHRでの現実逃避のおかげだろうか。

ちなみに蛇足だが、一夏はやっぱり間違えて必読の教材を捨てたので、僕のを代わりに貸した。でも結局全部をきっちり覚えることはできなかつたみたいで姉さんの愛の出席簿は無情にも振り下ろされたのだった。

ん、僕？束さんとISと魔術・魔法についての熱い設定の語り合いをした時にけっこう覚えたから必要なかったよ。やっぱりあいう会話って楽しいよね！でも他人に迷惑かけちゃダメだぞ！

それにしても、クラス長か！。

こういうのって僕の前世ではあんまし立候補とか無かったな！。で、仕方ないからクジ引きで決めて最後に残ったやつががつくりと肩を落とす、っていうのがテンプレだったよ。

小学校ではけっこう立候補する人が居たんだけど、思春期で色々気恥ずかしくなるからかな？

IS学園ではどうなんだろうね。高校というのものもあるけど、この学園本当に外人が多いから他のクラスでは立候補とかも多いのかもしれない。まあ、一組では無理だけどね。原作通りの流れなら、こいらのタイミングで

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

ほらきた。まあそりゃ、学園唯一の男子だし、こうなるのは仕方ないな。一夏頑張れ。

「はい、織斑くんがいいと思います！」

「わたしも織斑くんがいいかと！」

「わ、私は織斑くんがいいです!!」

…多いなあ、推薦。

流石ハーレム男だ、何時の間にそんな人気を獲得していたんだか。もうアレか、身体から女子を惹きつけるフェロモンが出てる疑惑が浮上するレベルだよこれ。

そんな風に考えて…いや、『現実逃避』していた僕の思考は、

「では、候補者は織斑兄弟ということで構わんな」

「ちよつと待った」

姉さんの台詞で一気に現実に戻された。

うん、ほんとにちよつと待った。貴方が何を言っているのかわからないよ姉さん。ここはしっかりと間違いを指摘しておかなければならないね。すうー、と息を吸って、

「何言ってるんですか先生！織斑って言ったら僕の右に座っているこの林念仁のことに決まってるでしょう!? 僕のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

「何言ってるんだよ先生！織斑って言ったら俺の左に座っているこの人間プレス機に決まってるでしょう!? 俺のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

.....。

「お前がやれエエエエエ！！！」

「黙れ貴様ら」

スパパアン！と姉さんの手が恐ろしい速度で動き、僕と一夏の頭を強打した。うがぁ！いつ…！たくないけど凄まじい衝撃が頭にツ！というか僕と一夏の2人を叩いたはずなのに音がほぼ重なって聞こえたぞ！姉さん、ひよつとするとIS乗れば燕返しとかできるんじゃないだろうか。相変わらず凄まじいスペックの姉である。

それはともかく、今の一撃でなんとか頭は冷えた。つまり…

……どうということだっばよ？いかん！まだ混乱してるぞ落ち着け僕！

「うごがぁ…お、織斑先生…！…どうということなんだよこれは…！！」

「どうもこうもあるか。女子の視線と意識は明らかに均等にお前らの方に向いているぞ」

「なんでツ！？」

驚愕する一夏。かくいう僕もビツクリだよ。

あたりを見渡してみると、確かに女子の視線が僕と一夏、それぞれ丁度半々くらいに集中していた。中には手を挙げたままで指をこっちに指しながらキラキラした目を向けている子までいる始末だ。

って、いやいやいや！一夏はともかくなんで僕にまで代表の推薦が来るのさ！？別に僕はたいしてイケメンでもないし、むしろ女子には最初怖がられてたくらいだったのに。

とりあえず後ろを向いてクラスメイトに聞いてみる。え、えーと、君たち？僕を推薦した理由はなに？

「お兄さまつてすつごく頼りになりそうな空気を纏ってますから！」
「なんというか、大樹というか鋼鉄というか…寄りかかっても揺るがないというか」

「さつきオルコットさんと話してたときの、面倒そうではあるけど優しげな横顔が…」

「いやいや、そんな空気だけで言われても困るよ！多分それチートのせいだよ！あと最後の人、アレは一夏に責任を丸投げしただけなんだよ！？もつとそういうヘタレの部分に注目してよ！」

「え、ええい！どうもクラスの皆さんは男子に対する線引きがまだしっかりしてないぞ！僕は弟とは違いますが、そういうのは全部一夏に頼んでよ君たち！」

「え、ちよつと待っていていや俺はなんで推薦されて」

「黙れこのイケメンリア充野郎！」

「零夏ああ！！せめて俺の疑問くらい解消させるよッ！」

君の理由はもういろいろとお腹いっぱいだから喋らなくていいです。とりあえずもげろ。

ちなみに、僕の台詞を聞いてクラスメイトの一部、具体的に言うとかポニーテールの和風女子さんがうんうんと同意するように頷いていた。

「篝ちゃん、ちなみに言葉のどこに納得したんだい？それ多分僕のも思ってるのと同じだよ。君は嫌がるかもしれないけど、一夏のどうしようもなさについては一度2人で話し合うべきかもしれないね。」

と、教室が喧騒に包まれ、姉さんがため息をつきながら出席簿を持ち上げた瞬間

「納得がいきませんわっ！」

バンツ！という音と共に、金髪少女　　オルコットさんが立ち上がった。

「そのような選出は認められません！その人の話を聞かないヘタレ男と野猿のような野蛮男の2人が揃って代表だなんて、このセシリア・オルコットが許しませんわ！」

僕等を指差して、オルコットさんは叫ぶ。

…あの怒りようからすると、適当に話を誤魔化して終わらせたのがそろそろバレたに違いない。はっはっは、まあ冷静に考えると一夏に丸投げしただけだからね。でもこれで騙されちゃうからちよるいさんなんて言われちゃうんじゃないかなあ。

とはいえ、今の発言はナイスだ、と僕は隣の一夏を見ながら思う。不快げに眉をしかめている様子を見れば、一夏がそのうちポロツと本音を出すのは確実だ。いいぞオルコットさんもつとやれ！

そして、一夏が挑発に乗って思いつきり自爆しようとして、僕は彼女の言葉に反応しなければそれで戦う流れはスルーできる。完璧じゃないか…！（フラグ）あとは一夏が適当に目立って僕は地味に振舞っていればそのまま一夏がクラス代表になるだろう。間違いない！（フラグ）

「　　としても後進的な国にいること事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で　　」

「イギリスだつてたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ…なんですってえ!?!」

などと考えている間に一夏がやらかしていたようだ。原作通りとはいえ本当に口が軽い男である。とはいえよくやった!僕のことなんか忘れてそのまま犠牲になってしまえ!

…でもね2人とも、悪口を言い合うならせめてお互いのことを言うべきだと思うよ?国レベルで言い合うって色々情けないだろ?まあ、お互い容姿が整ってるから悪口言いつらいのもあるんだろっけど。

よし、これは後でちゃんと一夏に言っておこう、なんて思っている間に、あれよあれよと会話は進み 「決闘ですわ!」「おう、いいぜ」「ハンはいるのか?」「わたくしを馬鹿にしすぎですわ!」 2人の模擬戦が行われることが決定した。

パンパン、と姉さんが手を叩いて場のまとめに入る。

「話をついたようだな」

やれやれ、危ないところだった。これで一応の区切りがついたな、

と僕は胸を撫で下ろす。これで妙なバトル展開はなさそうである。いやあ良かった。バトル展開とか心から御免被るからね。

と、そんな風に安心している僕のほうを見て、姉さんはクラスに結論を通知した。

「では、試合の日程は来週の月曜日と火曜日だ。各自訓練をしておくように」

ん？

ちよつと待った。何か聞き逃せないことが聞こえなかったかな。

…火曜日ってなに？え、二日…って、これはまさか！

「？織斑先生、何故二日に分ける必要がありますの？」

「…はあ。お前達、そこでコソコソしている奴の存在を本気で忘れていたのか？」

「…あつ！」

「ブルータスお前もかああああ！！」

「誰がローマ人だ馬鹿者」

ねえさああああああんツ！！余計な事をおおおおおお！！

まさかの裏切りである。なんだよ別にいいじゃないか僕のはスルーで！本人たちがヒートアップしているんだからそこに水を差す必要は特に無いじゃないか！

バカな…どうしてこうなった！せつかくこの流れから逃げられると思ったのにツ！真の敵は身内にいたというのか…！オ・ノーレエ！

「やれやれ…言うておくが、別に嫌がらせで言ったわけではないぞ？」

「いやあそれは明らかに嘘だよ姉さん！口元が微妙にニヤけてるのがなによりの証拠だよね！」

「……まあ、どうせお前は参加することになっていた。政府からお前のデータを取るように言われているからな」

「黙殺された！っていうか何でデータがいるのさ！僕入学試験のとき教師と戦ったでしょ！？」

「馬鹿者。あんな戦い方でデータが取れるか…そうだな、月曜日に零夏と一夏、火曜日にオルコットと男子2人が戦え。オルコット、できるな？」

「ふんっ、問題ありませんわ！」

「どんな戦い方したんだよ零夏…」

って、最初から僕が戦うの決まっていたの！？それならもっと早く言つてよ！今の僕のニヤケ面とか完全に姉さんの掌の上だったじゃないか恥ずかしい！！

というか、やっぱりあの戦い方じゃダメだったのか…でも、ああするのが一番勝率が高かったからやらざるを得なかったんだよなあ。僕飛べないし、相手が油断してたしね…

「見ていなさい織斑兄弟！このわたくし、セシリア・オルコットが実力の違いというものを見せ付けてやりますわ！」

「ハッ、言ってる！俺たちは負けねえからな！」

「はあ…」

後悔先に立たず。

2人の宣言を横目にしながら、やっぱりこうなるのかと、僕はがつくりと机に突っ伏した。

ちくせう。命がヤバい勝負なら何があっても逃げるのに…この場合、『安全な戦い』だからなおさら否定しづらい。どうも最近本気

を出したのが原因かなあ…戦うなんて危ないこと、心の底から嫌いなはずなんだけど。

「やれやれ。結局お前は戦いたいのかそつでないのか、どつちなんだ？」

「戦いたくないに決まってるじゃないですか…はあ…」

「そつは思えんがな。…まあ、別に死ぬわけでもない。お前も私の弟なら、ひとつの『試練』だとも思えばいいさ」

「」

ぴくり、と身体が動いた。

『試練』。

その言葉を聞いた途端。

僕は確かに、身体の奥底で、

魂ガ、震エルノヲ感ジタ。

(…まいったなあ)

わずかな期待を含ませた、姉さんの言葉を聞いて 僕は思う。

(…その言葉には弱いんだよね、本当に)

机に突っ伏したままでよかったなあ、とぼんやりと思う。

多分 今の僕の顔は、獣のように笑っていたと思うから。

放課後になった。

「あ、2人ともちょっと待ってくださいーい！寮の部屋割についてお話があるんです！」

「…え？俺たちは自宅通学じゃなかったんですか？」

これからの予定に憂鬱になりつつも授業を終え、さあ帰るか…と

一夏と席を立つた丁度その時、山田先生がこちらに駆け寄ってきてそんなことを言った。

…ああ、忘れてたよ。そういえばこれがあったねえ…

「いえ、貴方達は色々危ないことが起こりそうなので急いで部屋を用意して、今はその説明をしに来たんです」

「ああ、そうでしたか。お疲れさまです先生」

「い、いえっ！れ、零夏くんも朝はありがとうございますっ
「いえそんな」

ああ…この先生いい子だなあ…精神的には年下なのも手伝って、つい頭を撫でてあげたくなるよ。さっきのやりとりで消耗してた僕の心がすごい勢いで癒されていきますよ！

しかし、癒されるのはいいんだけど…ひよっとしてこの流れだと、一夏は篝ちゃんと同室になって、僕もどこかの女子と同室になっちゃったりするんじゃないか？

やばい、多分これ当たりの気がする。…なんてこった…僕は疲れた心を家に帰って休ませることもできないのか。知っているか？女の園からは逃げられない。

い、いや、まだまだッ！まだ可能性は残っている…一人部屋が、栄光の一人部屋が僕にはあるはずなんだッ！！悪足掻きでもいい、せめて可能性だけはつなげなげなげないんだ！

「先生っ！部屋を用意したという話ですけれどもっ！」

「ひゃああ！？あ、ははははいそうです何が！！」

いきなりの大声、おまけに急に呼びかけられたことでテンパリ気味の山田先生だが、申し訳ないけど今の僕にそれを気にしている余裕は残念ながらない！一気に質問させてもらいますッ！！

ふ…ふふ、燃え尽きたよ…真っ白にね。そんな僕に東さんの爆笑がどこからか聞こえてきた。どうして音のはずなのに草を生やしていることがハッキリ伝わってくるのだろうか。非常にウザい。

「し、すっかりしてください零夏くん!!!」

「いや先生…なんでそんなに反応がマジなんですか…?」

呆れた一夏にまでツッコミを入れられつつ、それでも僕を駆け寄って抱き起こす山田先生。

その目にはなぜか大粒の涙が溜まっている始末である。…ああ、この子本当にいい子だなあ、こんなバカコントに付き合ってくれるなんて。ちよつと本気で感動してしまった。うん、へこんだ時はこの先生に癒してもらおうのが一番だな。

「ああ、すみませんね先生…ちよつと、バカやりすぎたみたいですよ…」

「ご、ごめんなさい私の力不足で…というか今どこからか爆発音が聞こえてきましたよ!?大丈夫だったんですか!?!」

「大丈夫だよ先生。僕もこれから、頑張っていくから」

「それは去るときの台詞ですよ零夏くん!?明らかな消滅フラグです!!!」

「ああ 安心した。…がくっ」

「それも死亡時の台詞ですってばあ!ね、零夏くうううううううんっ!!!」

「…教師に何をやらせているんだお前は…」

正直このネタやりたいただけだった。反省はしている。

結局、この悪ぶざけは、日誌を書き終わった姉さんのツッコミが

入るまで続いたのであった。

…ちなみに、何時の間にか一夏はどこかへ去っていた。まあ、たぶんトイレを探しに行ったんじゃないかな。六時間目の授業の終わりにくらいに気付いたみたいだし。

こうして時間を潰して、部活後の篝ちゃんのシャワー時間と鉢合わせることになるんだろうね。さすが一夏である、最早感動的な手際の良さだ。もう色々どうしようもない男だと思う。

「…はあ。んで結局、これからは逃げられないんだよなあ」

全力でフザケまくることによって、なんとか心の余裕は回復したものの…『女の子と同室』であるという事実は当然ながら消え去ったりはしなかったようだ。

はあ…。気が重い。

一応、姉さん達は一週間くらいで個室を用意してくれる、とは言ったものの、女子と同室で一週間心が休まらないってことなんじゃないかな、それ？年頃の男には厳しいものがあるよ…

…仕方ない、ここまできたら相手がいい子であることを祈ろう。

『1037』と書かれた扉を前にして、まずは当然、ノックを試みる。さて、一体誰が同室なんだろうね？

コンコン

……。

…ありや、無反応？

チートの身体能力を活かし、物音や気配を探ってみると　ん？中に一人いるみたいだなあ。なんで反応がないんだろうか。もう一回ノックを試してみたがやはり返事がない。寝てるんだろうか？だとしたらえらく早い就寝になるけれども。

…僕は万が一にも一夏のようなヘンなフラグは起こしたくない。中に入る時は十分用心しないとね。

というか、あんなラッキースケベを散々やってたら普通理性のほうもたないと思うんだけど。姉さんの下着やらなんやらで慣れすぎてる、なんて言っても普通、慣れたりしないと思うんだけども。僕は全然下着には慣れないしね。

とにかく、貰った鍵を挿し、ゆっくりと用心しながら僕はドアを開けて

「…は？」

目の前の光景に、硬直した。

…いや、えーと…なんだこれ？

冷静に部屋を見渡してみよう。IS学園の寮のデザインは玄関から入って、左手にシャワールームがある。どうやら洗面所も兼ねてるみたいだね。まあそこは別にいい。

で、ちょっと進むと各々の勉強机が置いてある。ここも問題ない。そして実はこれが一番最初に目に入ってたんだけど、特徴的なのが大きなベッド二つ…ふんわりとした、一目で上等なヤツだとわかるものである。

で、そのうちの一つが、ぬいぐるみで完全に埋もれている。

うんおかしいね。

詳しく状況を説明すると、ベッドの枕から足の部分まで全てがぬいぐるみで埋め尽くされており、もはや布団が判別不能な状態だ。というか積み上げすぎてベッドからこぼれ落ちてしまっている。それらも結構な数が僕の足元まで転がってきてるね。

え、なにこれ。

僕、ドン引きである。こんな膨大な量のぬいぐるみ、専門店でお目にかかれないんじゃないのかな…ひよっとして、この部屋の主は店ひとつを全て買い占めたんじゃないだろうか。とはいえこんな数の量だとそもそも部屋に入りきらな

『…きゅー…』

「って埋まってるのかよルームメイトさーんっ！！」

まさかの崩落事故だった！。何があつたのさ一体！？

ええい、とりあえずぬいぐるみを退かすぞ！後片付けの手間は今は考えずに、ぽいぽい人形を退かして…ってめちゃくちや多いな！あーもう鬱陶しい！

「おりゃああああっ！！！」

「わっひゃあああああ！！！」

どばー！と怪力を利用してぬいぐるみを纏めて吹き飛ばす。勢いでその下にあつた誰かもゴロゴロとベッドから転がり落ちた。

…おいおい、ここまでぬいぐるみに囲まれていながら本人は着ぐるみまで着ているぞ…どこまで徹底しているんだか。最早呆れを通りこして尊敬まで覚えるレベルである。

「ふはー…あ、ありがとー助かったよー…あれ、おにーさま？」

「え？」

「あー、ひどいよーおにーさま同じクラスなのに忘れちゃったのー？」

この声を。

僕の思考が、その声を聞いた瞬間に硬直する。

その姿が、朝見かけたクラスメイトだからではない。もっと別のところで、心が…あるいは魂が、起き上がってきた少女の声に、既視感を訴える。

僕は、この声を知っている。

それに戸惑う僕には気づかずに
拶を交わした。

少女は、のほほんとした挨拶

「のほとけほとね布仏本音だよっ？よろしくね、おにーさま」

バーサーカーは、強いね

その声は、どこか。

『白い少女』の声に似ていた。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（後書き）

英雄の力は果たして人間の器に収まるものなのだろうか。
彼は本当に『彼』なのか。

そんな疑問が、ひとつの少女の『声』から生まれた。

というわけで声優ネタを織り交ぜながらのほんさん登場です。
一応ヒロイン候補の一人ですね。ルームメイトという強力な補正を
引っさげてます。しかし、僕はいい加減ヒロインを決めるべきかも
しれない…

あと、勝手にのほんさんがぬいぐるみ大好き少女だという捏造設
定をねじ込みました。

本当はそんなつもりじゃなかったんですけど、モフモフに埋まって
顔だけ出してるのほんさんを想像したら自然と手が動いていまし
た。仕方ないね。

まさかのタイトルミス。修正しました

幕間 壱（前書き）

ISのカケラもないお話です。
幕間なのでスルーしても問題はありません。
ちなみにこの後もう一話投稿します。

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしく願いします。

幕間 壱

夢を見る。

白い。

最初に浮かんできたのは、そんな言葉だった。

空を見上げてみれば雪が降っている。…ああ、だから白いのか、と今更ながら僕は得心した。

一体いつから降っていたのだろうか、などと考えようとして、そんなことはどうでもいいことだと気付く。

ぼんやりと、辺りの輪郭を曖昧にしながら降る氷の粒は 考
えるのが馬鹿らしくなるくらいに、綺麗だったから。

辺り一面は白く白く染まっていて、他の色はわずかに見え隠れする樹木の色くらいしかない。

今の季節は春だというのに、こんなにも雪が降り積もっているから…ああ、これは夢なんだな、と場違いなことを心の片隅で思った。

深い深い、森の中。
地面も、木々も、一つ残らず白に染まる。

その景色があまりにも美しくて。あまりにも神秘的で。
時間が経つのも忘れ、僕はこの白い世界に見入っていた。
肩に積もる雪も、吐く息が白くなるのも気にせず、ただぼんやりとそれを見続ける。

…どのくらい、そうしていただろう。
ふと、誰かに呼ばれた気がして　僕は後ろを振り向く。

『…え？』

不可解な事象に、思わず疑問の声が出た。

いつの間にか、僕の後ろに道ができている。
いや、道かどうかはわからないけれど　その場所だけ木が無い。まるで森そのものが、その場所に育つのを拒んだかのように、僕の背後にだけ不自然な空白が生まれていた。
どうして、と思ったけれど、そもそもこれは夢だったと思い出す。
なら、きつとこの先に何かがあるのだろう。ぼんやりと…まさしく夢心地で、僕はただ足を動かした。

踏み出した足跡は、すぐさま降り積もる雪に覆われて消えていく。
何故だかわからないけど　それを、とても悲しいと僕は思った。
た。

そして、その場所に辿り着く。

この白い世界で そこだけが違う色だった。

よく知っている少女の眠っている姿。

その身体に、無遠慮に絵の具を上から塗りつけたように そ
の部分だけが違和感を撒き散らしていた。

あまりにも鮮やかな、真紅が。

『
』

鼓動が、呼吸が、早くなる。目の前の光景を、脳が否定する。
平衡感覚がおかしくなるのを感じた。歪んでいるのは僕なのか、

それとも世界なのか。それすらも判断がつかない。
ただ食い入るように少女を見つめて、僕は彼女の姿を見続ける。

凍えた風が吹きつけ、木々を揺らした。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに気付かぬように。

降り散る雪が、頬に触れた。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに呑みこまれたように。

氷の粒が『融けない』という事実が、突きつけているようだった。

彼女はもう、人形ホムンクルスに戻ってしまったのだと。

もう二度と、彼女が目覚めることは無いのだと。

これが、死だ。

『守れなかったのか』

逃げろ、と心が叫ぶ。

自分に降りかかる死も、他人に降りかかる死も。何もかもが恐ろしい。

これは僕のトラウマだ。生きている限り、この感触を忘れることはないだろう。まるで刻まれた烙印まじゅうのように、どうしようもなく僕を締めつける。

アレは在ってはならないモノだ。誰もが恐れ、否定し、遠ざけようとする、生きている全てと相容れないモノだ。

だから逃げる。今すぐ逃ゲロ。振り返ラズニ走りダセ　　！

叫びに押されるように、よろよると心が揺れる。

意識がはつきりしない。呼吸も覚束ない。手足の感覚なんてとつくに無くなっていて、それでも立っていられたのはたぶん奇跡みたいなものだろう。

目の前には死。後ろには生。　　なら、どっちを取るかなんて、決まっているはずだ。そもそも僕にとって、これは選択肢ですらなかった。

ああ、なんて弱い　　自分なんだろう。

その事実にも、反吐が出そうな不快感を抱きながら。それでも僕は、

前へ進んだ。

『…白い少女よ』

勝手に動く身体に呆然としながら、僕は今更なことに気付いた。

これは確かに夢だ。

だけど、ここに立っているのは　僕じゃない。

『私は、貴方を護れなかった。それでも』

吐き出す言葉には、確かに少女への深い感情が感じられた。

ただ、死そのものが恐ろしくて逃げようとした僕とは違う。『彼』
にとつて、これは譲れないことなのだろう。立ち向かって、勝ち取
らなければならぬ何かがあるのだろう

『貴方に渡された言葉、この誇りがある限り　』

少女を抱え上げ、『彼』は痛みをこらえるように、拳を握り締め
ながら　それでもなお、足を止めずに森から去っていく。

…夢だということに気付いたからだろうか、僕の意識は急速に薄
れていく。恐らくはもうすぐ、この夢から覚めるのだろう。

遠のいていく白い世界にはただ、『彼』の独白が響いていた。

それを聞いて、思う。

…ここが僕の夢の中なら、どうしてこんなものを見たのだろうか？
逃げ出そうとする僕、挑もうとする彼。夢の中では僕たちは別人
で、はつきりと分かれている。けれど、現実の…本当の僕は一人だ
けだ。なら、この夢は僕の『中』から出てきたのだろうか。

ひょっとして、僕は

『貴方のために、闘い続けます
』

『英雄』のようになりたいと、望んでいるのだろうか？

幕間 壱（後書き）

とある平行世界。

アインツベルンはセイバーとしてヘラクレスを召喚し、その無双の技術で次々と勝ち進んでいく。

しかし、そこに巨大な壁が立ちふさがった。バビロニアの最古の英雄王、ギルガメッシュである。

彼の持つ『神を縛る鎖』の前には令呪すら効かず、彼は捕縛され、今回の『聖杯』でもあるイリヤを奪われてしまった。

鎖が解けて、急いでマスターの元へ向かうも…既に少女は、心臓である聖杯を抜き取られて息絶えていたのであった。

しかし、彼は止まらない。戦いをやめることはなかった。

少女の言葉に、望まれた誇りに応える為、魔力が切れ、いずれ消え行く体でも　それでも、ヘラクレスは少女を抱え、進んでいく。

彼はまた、いつかの日々のように、途方もない試練へと向かっていったのだった。

彼の剣は果たして、太陽のごとき王に届くのだろうか

という夢を見た、というお話でした。

前半はただの夢、後半からがヘラクレス視点ですね。

ちなみにこの世界線の基本はUBWルートなのでこの後小聖杯はシンジに突っ込まれています。ワカメエ…

今回はバサカ枠は無しで、セイバーオルタちゃんがアヴェンジャー名義で呼ばれて士郎に救われる話、という脳内設定。

ぶっちゃけオチは特に考えていませんが多分ギルが慢心して負けます。相変わらずいつも通りな慢心である。

さて、ある程度次の話でも説明していますが、今回の話は零夏の見

た『夢』です。色々な意味でヘラクレス強いよ生きるの辛いよというテーマでした。

裏話をしますと、零夏 능력は『ヘラクレス』の力を直接そのままコピーしたのではなく、冬木の聖杯により『サーヴァント』というカタチの概念に変換されたものをコピーしています。

神代の時代と現代とは『常識』などの尺度が違うので、このように濾過、あるいは翻訳しないと零夏には理解ができないわけですね。『現代に即した英霊化』というヤツです。

…まあ、『イリヤのことを覚えているヘラクレス』を出すための設定なんですけれどもね。

要はバサカをクラスカードにしてから身体に突っ込んだようなものですな。狂わないけどね！

しかしバサカを喋らせると違和感が凄いですね。

一応きのこシナリオの某ゲームでは正気に戻ったバサカが書かれますけど、口調が執事のくせしてぱんつはいてない、更に虎聖杯には特注サイズの衣装を頼むっていうフリーダムっぷりでした。

こんなん資料になるわけねーだろ菌糸類イイ！！

L i f e 5 嵐の前に、朝食を（前書き）

やっとメインヒロインさん出せた！やったー！ポテチヨサトシクーン！

次回、ようやく戦闘です。VS一夏をお楽しみに。

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしく願いします。

Life 5 嵐の前に、朝食を

目が覚めた。

「…ああ、朝か」

一言呟き、僕は起き上がってカーテンを開ける。

シャアア、という音を立てながら日光が部屋に入ってきて、眩しさで少し目を細めた。

昨日に続き今日も晴れである。うーん、今日もいい天気

とりあえず、何の気はなしにパシパシと顔を叩く。痛みはないけど、衝撃があるのでここは現実のようだ。…うん、夢との区切りはしっかりつけないと、ね。

時計を見ると、時刻は六時半。いつもよりちょっと早起きというくらいだろうか。

寝起きはいい方なので特に眠気などは残っていないが、今見た夢のせいか微妙な気分である。

「『誰』の夢なんだか、まったく…」

ついつい、溜息が漏れてしまった。

先程見たことを思い出す。

白い世界、血まみれの少女、とあるサーヴァントの誓い

誰かに話したら『漫画の読みすぎだろう』と言われることは間違いない。そんな内容の夢だった。

…僕の知っている聖杯戦争にあんなシーンは無かったから、やっぱりアレはただの夢でしかなかったのだろうか？バースーカーのはずなのに喋ってたし。

あるいは、幾多の平行世界から『英霊の座』に集められたひとつの戦いの歴史なのかもしれないが…まあ、そんな考察はやめておこう。

キリがないし何より、違うとわかっているとしても、自分の中に他の誰かが居るなんて仮定は気持ちのいいものじゃないしね。

…それに、『平行世界』という単語を出すと、とある魔法使い宝石翁のことが 正確には彼が作った危ない危ないステッキのことが連想されそうだから危険だ。アレは色々まずい。

嬉々として混沌を振りまく東さんと、洗脳されて大変なことになっている姉さんの絵面があまりにも鮮明に浮き上がってくるし、一夏の周りの女子がそれに加えて更なる騒動を マジでこのへんにしておこう。本当に実現しそうで怖いから。というかこのネタたぶん既出だ。

…うん、馬鹿なことを考えてたらいい感じに落ち着いてきたよ。

「相変わらず、僕は僕だ。呑まれないようにしないとね」

敢えて言葉に出して、自分自身の確認を試みた。

僕は『織斑零夏』だ 他のもない。

人生を長く長く、幸福に生きて、死ぬのからひたすら逃げ続ける。それが僕だ。たとえ仕方なく戦うことがあつたとしても、『ヘラクレス』に変化するわけじゃないんだ。

そう自分に言い聞かせる。僕の心に鎧は無いから、こづいけア

はきつちりとしておかないと。見た夢のことはとりあえず忘れて、今日もいつも通りの僕でいなきゃ、ね。

なんてことを心に決めていたら、

「…んにゅむにゅむじゃ…」
「ん？」

もぞもぞと隣のベッドで音がした。

…ああ、そういえば昨日はルームメイトと顔合わせしたんだっただけ意識していたのに今まですっかり忘れて、気配も探っていなかったあたり、今の夢で僕はけっこう動揺していたらしい。

まずったな、独り言とか聞かれてないよね？というかカーテンを開けたりするんじゃないかな。迷惑だった。

「…うーん、朝あゝ？ぐつどもーにんぐ…？」
「ありゃ、これは申し訳ないなあ」

起き上がる声でしたので、結局彼女も起こしてしまったようだ。大失敗である。

とりあえずは謝罪をして、朝ゴハンを奢るあたりで許してもらうことにしよう。そう考えながら、僕はとりあえず飲み物でも用意することにした。

「ごめんね本音ちゃん。起こしちゃった？」

僕の『能力』は、第五次聖杯戦争の『バーサーカー』の…つまり、大英雄ヘラクレスの力を得る、というものだ。

それは、ただ単に宝具や身体能力を手に入れる、ということではない。

そもそも普通に暮らしていた僕が唐突なバトル展開とかができるわけがないのは明らかだ。力というものは道具だけでは決まらない。拳銃ひとつだって素人はそう当てられるものじゃないんだ。

だから僕は、ヘラクレスが持っていた『経験』、『判断力』、『技術』など 数多くの彼を構成するパーツすべてをそのまま貰い、身体の内にも保持している。

「くう…すぴー」

「こらこら本音ちゃん起きてー。年頃の男に簡単に寄りかかっちゃダメだよ？」

「…んー…ねむいのはおにーさまが起こしたせいだよ…」

「それを言われると申し訳ないけどさ…というか、『おにーさま』ってやめない？そもそも同い年だし」

「はぁ…い…じゃあ、他の名前考え…すやすや」

「ああ、寝ちゃった。…というか、さっきから思ってたけど…なんだこのかわいい生き物」

これにより、僕は（体格などの一部を除いて）英雄の戦闘力をそのまま手に入れることができている。はっきり言って、今の僕を倒せる存在なんてISを含めても殆どゼロだろう。それほどヘラクレスという存在は強力なのである。

だが 『経験』があるということとはつまり、様々な『記憶』もあるということだ。

英雄本人の『人格』は無いにしろ（あつたら僕なんて押しつぶされてるかも）、『記憶』というものは人格形成に大きな影響を与えらる。その上ヘラクレスは勇猛さでその名を轟かしている英雄でもあるから尚更だ。

だから、教室でそうだったように、『ヘラクレスに関連したこと』を感知した場合、僕はやや性格がブレることがある。そういう意味でも、戦闘とかが好きじゃないんだよね。やってる最中はやけに好戦的になって、後になってものすごい後悔やら恐怖やらが押し寄せてくるから。

「ふー、朝練疲れたー飲み物飲み物…って、おおおお兄さまッ!？」

「そんな!？既に女の子と朝チュンを迎えてッ!？」

「僕は違います。…というか、まだ朝だから静かにね?」

「あ、御免なさい…」

「…すぴー」

「よしよし。で、この子は普通にルームメイトなだけで、抱きついてるのはむしろ小動物的なコミュニケーションの一端だと思うよ」

「ああ、なるほど…」

「そりゃー本音だもんね…」

「…なんか妙な信頼だねえ君たち…あ、本音ちゃん食堂着いたよー」

「はっ！デザートっ！！」
「……眠気より食い気！？」「」

さて、そんな話はそろそろ切り上げるとして、現在の状況を説明しよう。

時刻は七時十五分。

僕はコーヒを一服してから身支度をして、本音ちゃんと食堂に来たところで……と、その前にルームメイトの説明がまだだったね。

僕の隣にいる眠たげ少女。彼女の名前は、布仏本音という。

一夏は原作で『のほんさん』と呼んでいる少女だ。いつも袖が余っている服を着ていたり（というか今の彼女の格好は完全に着ぐるみだ）、間延びした口調、柔らかい笑顔、あと個人的には穏やかな声などが印象的で、周囲に独特のほんわかとした空気を振りまいてくれる子である。

故にあだ名が『のほんさん』。実は一夏は途中まで本名を知らずあだ名で誤魔化していたという経緯がある。なんて奴だよまったく。

で、どうして僕がそんな彼女を名前呼びしているかと言うと、特に好意やらの意味があるわけではなく、むしろ自分へのケジメのよくなものである。

時は遡り、昨晚。つつい『白い少女』と目の前の彼女をどうしても比べてしまい表情が硬かった僕に、『ルームメイトなんだから名前呼びでいいよー』と本音ちゃんが親切心から言ってくれたのが切っ掛けだ。

なんとというか、それを聞いた時にようやく僕は自分の無礼に気付

き、心底恥ずかしく、また彼女に非常に申し訳ない気持ちになった。人はそれぞれ明確に違うというのに、声が似てる程度で何をやってるんだ僕は。数分前の自分をブン殴りたい気分である。

そんなわけで、今後は絶対に声なんぞに惑わされずに接するぞ、という決意も込めて彼女のことは名前で呼ぶことにしたわけなのだ。

…ただのんびりとしているわけじゃなくて、こういう気を配れるところが本当にいい子だなあ。山田先生と並んでの癒し系筆頭少女、それが本音ちゃんだ。非常にありがたい話である。

そして状況説明に戻ると、そんな彼女を連れて現在食堂に来て、朝練帰りであるうクラスメイトの女の子2人に出会ったというところである。

どうやら友達からも本音ちゃんは恋愛からはほど遠いと見られているようだ。…まあ、原作では一夏にもぺたぺたくついてたみたいだしその通りなんだろう。たぶん。

「じゃ、ここで話してるのもなんだしとりあえず朝メシ食べちゃおうか。僕は案外大食いだから時間取るんだよね」

「え、意外ですねお兄さま、そんなに食べるんですか？」

「一夏の五人分とか余裕」

「！？」

「今日はいつもより豪華なデザートだ〜！」

そんな僕の話に反応することもなく、本音ちゃんはこれからの食事に思いを馳せていた。その目はキラキラと光っていてどこことなく漫画のような瞳になっている。

…そんなに僕の『奢るから許してくれない？』という言葉が嬉しかったんだろうか？まあ、IS学園だから値段が高いものも揃って

るのかもしれないね。僕の財布は案外金入ってるから大丈夫だけど、
…女の子なのに朝から色々食べて大丈夫かな？とも思ったけど、
まあそこまで口を出すことでもないか。

さて…お待ちかねの食事タイムだ。

学園では他の生徒がいるからあんまし迷惑をかけないように注文しなきゃいけないけど、この時間ならたっぷり量は摂れるはずだ。
焦る必要はどこにもない。

…さーて、IS学園のメシはどんな味かな？美味いと評判だし、
今から色々楽しみだな…！ククク…！！

「行くぞおばちゃん。米の貯蔵は十分か…！！」

「フ、こちらら和洋中全て取り揃えてるよ…！！」

「え、なにこの展開っ！？」

ツッコミの声を敢えて無視し、僕は食券の自販機にコインを突っ込む。

僕はこう見えてけっこうな量のメシ屋を泣かせてきた大喰らいだ
ツ！味にはけっこううるさいぞ…！！（ウザい客である）
フードイーター

これからお世話になる身としては最初が肝心！料理を作ってくれたことに感謝しながら おばちゃん！その能力、測らせて貰うぞツ…！！

「頂きますッ!！」

ゴオッ!と、謎のオーラを出しながら、差し出されたA定食の箸を掴み取る。

こうして、後に『伝説の始まり』とも呼ばれる、僕たちの最初の闘いが 幕を開けたのだった。

「うーん、この鯖がいい感じの味出してるな!。箸、そう思っただろ?」

「あ、ああ。そうだな」

「いやー、後で味の出し方教えてもらえっかな?企業秘密とか言われるかも」

ぱくぱくと朝食を摂る一夏を横目で見ながら、こっそりと誰にも気付かれないうちに、篠ノ之箸は溜息をついた。

自分は、織斑一夏のことが好きである。

それはどうしようもなく明らかなことだ。本人に言えるかは別問

題として、箒はその気持ちを認めていた。ずっと、健気に、箒は夏のことを好きなのである。

では、織斑零夏のことをどう思っているか？と聞かれると、彼女は非常に返答に困るだろう。

そんな、一言では言い表せない複雑な感情を、彼女は零夏に抱いていた。それは、彼女が姉に持つ感情に似ているかもしれない。

さて、ここでひとつの疑問が生まれる。

一体なぜ、一夏が隣にいるのにわざわざ別の男のことを彼女が考えているのか？

…その答えは簡単だ。

「いやー、美味かった。これが毎日食えるとか幸せすぎるよ」

「またお前はそういう荒らし行為を…昔賞金を荒稼ぎしてただろうに」

「国の税金でメシがうまい！」

「お前は一回怒られる！」

「正直すまんかった。…ああそうそう、一夏。結局、ルームメイトは誰だったんだい？箒ちゃんかな？」

「あ、よくわかったなあ。そうだよ」

単純に、目の前に他の男

織斑零夏がいるからである。

ちなみに、彼は既に食事を終えており、隣ではそのルームメイトが幸せそうにパフェを食べているところだ。朝からそんなに力ロリを摂って大丈夫なのだろうか、などと箒は頭の隅で思った。

しかし、正直な話

そんなことを指摘する余裕は、彼女には

ない。

(…私に話題が及ぶ前に離れるべきだな)

一人そう思い、箒は静かに息を吐く。

食べるスピードを少し上げる。箸が止まっている一夏よりも早く食べ終わるように。なるべく『隙』を見せないように静かにしながら、箒は目の前の魚をつまもつとして

「ふーん。じゃあもうとつくに箒ちゃんは、一夏にセクハラされたんだろうねー」

バキィ！と、持っていた箸がヘシ折れた。

96

「な、何言っただよ零夏っ！？おい箒、大丈夫か？怪我不いか？」

「あ、ああいや、だだ大丈夫だももも問題ない」

「全然大丈夫じゃなさそうだぞ！？」

箸を折ったこともさることながら、心配した一夏が顔を近くに寄せたことも大丈夫じゃない原因なのだが、当の本人はそんなことはまったく気付いていないようである。

昨晚、バスタオル一枚の姿をガン見したのを早くも忘れているのだろうか？この優しさもヘンな具合に問題になっているようである。そんな一夏の反応に嬉しいやら呆れるやらで顔を赤くしていた箒だったが、

(…！？し、しまッ)

今の行為は 致命的な『隙』だった、ということに今更ながら気付く。

ハッ！と気付いてそちらを向くと、零夏がその様子をニヤニヤしながら見ていた。あまつさえ、『よかったね』などと口パクで付け足してくる始末である。

怒りと羞恥で顔が赤くなるのを感じて、思わず拳の一発でも喰らわせようとした筈だったが、しかし一夏が近くにいるせいで大きなアクションを取れなかった。『これも計算通りなのか…ッ！』と、零夏の（無駄な）手際の良さに非常にイライラする筈。

そう、これが筈が零夏を好きになれない理由のひとつだった。

要するに、彼は筈で遊ぶのである。

昔からどういっわけか自分の恋愛感情を知っていて（バレバレでした）、筈が本気で怒らないくらいのレベルでからかってくる。たまに『アメ』のような一夏との接触をさせたりするから尚更、まるで動物扱いされているようで筈は彼のことを苦手としていた。

そう、恐らくは自分に意地悪な兄がいたらこんな感じだったろう、と筈は思う。同じ年のはずなのに、どういっわけか零夏は大人びていて、自分は無口だったこともあり絶対に口ゲンカでは敵わなかったのだ。

得意の剣道に持ち込もうにものらりくらりとかわされ、最終的には何故か一夏と練習をすることになり有耶無耶にされていた。そして筈も何時の間にかその状態に満足して誤魔化されていた。

（ぐっ…っ、今度は忘れんぞ…ッ！）

しかし　もう箒も高校一年生である。さすがにあの時のようにはいかないだろう、と彼女は夕力をくくつていた。

これからの学園生活ではキツチリ文句を言つて、誤魔化されないようにするのだ、と彼女は誓つたのだ。

大事なのは口車に乗せられず、『アメ』に引つかかつたりしないことだ。故に、これからは零夏の行動に細心の注意を払つていれば問題ない。そう、細心の注意を

「いや、ゴメンゴメン。まさか箸は折れるとは思わなかつたよ」

「違つだろ！まずセクハラ云々のことを謝るべきだろうに！」

「え？してないの？」

「……………してない」

「…バレバレじゃん…まあ、正直それはどうでもいいや。ねえねえ箒ちゃん、箸が折れちゃつたんならさ」

来たか！これを言わせるわけにはいかないッ！

これさえ止めれば大丈夫だ、たとえどんな『アメ』が来ても、心構えさえあれば問題はないのだ！

「ふんっ！おい零夏、悪いと思つているならお前はこれ以上喋るな。もう私はお前に騙されたりは」

「一夏に『あーん』してもらつたら？」

「しないのだ　えっ」

思わず、箸の動きが止まった。

……。

……。

長い沈黙が過ぎ、そして

その後、零夏と本音が去ったテーブルの後には、なんだか甘酸っぱい、周囲からガン見される妙な空気が漂うことになる。

結局　　箸はまたもや、零夏に逃げられてしまったのであった。

L i f e 5 嵐の前に、朝食を（後書き）

また朝チュンだお…ねむいお…

今回は日常編。で、本編同様ISの修行なんて零夏にはないので一週間はキンクリらせて頂きます。ご了承ください。

それにしても、篝ちゃんが本当に動かしやすいです。感動です。というかモツピーまでちよろいキャラになっちゃいましたけどこれ大丈夫なんですかね…？

でも、原作でもだいたいこんな感じなんですよね。将来大丈夫なんでしょうか。弄んでおいてなんですけど心配です。

しかしここまで力入れてもシャルロットとラウラが来たら吹き飛ばされるのがモツピー。

すさまじいキャラパワーですよねあの2人は。特にシャルが。がんばれモツピー！君の明日はどっちだ！

…え、その前に一人抜けてる？何の事やら…（すつとぼけ）

さて、ヒロインの方ですが、午前六時現在、こんな深夜〜早朝にもかわからず結構な量のアンケートに関する感想が来ました。みなさんありがとうございます！

現在はのほほんさんが優勢ですね。なんというか、優遇しすぎたかもしれません。次点は束かな？

しばらくアンケートは実施いたしますので、お暇な方は投票をどうぞ。

あと、僕今右手が腱鞘炎になりかけてるんで更新が遅れたら病院送りになっていると思ってください。

三日、四日に一回は更新していきたいと思しますので、申し訳ありませんがお待ちください。

L i f e 6 強さの在り処、強者の在り方（前書き）

アンケートが一気に40件以上来てびっくりでした。
感想の海に溺れる！溺れる！

これが嬉しい悲鳴というやつですね、ありがとうございます。
アンケートはもう少し募集させて頂きます。

で、思ったのですが、ハーレムという書き方ではなく『のほほんさんと束さんがいいです』的な書き方もすごく多かったですけど、これは複数の女の子と三角関係的な流れを望んでいるってことではないんですかね？

女の子全員の幸せが望まれているのか、悲しい二択の末に選ぶのが美しいのか。うーん悩みどころですね。番外編という手もあるしなあ。

あと、今回の話は前編です。延々と書いてたらバトルに入ったところで途切れちゃったよ！これが予告詐欺か！申し訳ありませんでしたッ！！

アンケートのお知らせ

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

1 束さん

2 のほほんさん

- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

L i f e 6 強さの在り処、強者の在り方

そんなこんなで、一週間が過ぎた。

今日は月曜日。

一組女子一同が待ちに待った、織斑兄弟の つまりは、僕と
一夏の対戦日である。

え？話が飛びすぎてる？いや、だって仕方ないじゃないか。一夏にはどうも色々なイベントがあったようけど…僕については、正直たいして何もなかったんだよねえ。

あの後僕がやったことと言えば、授業を受けて、また食堂でゴハン食べて、たまに篝ちゃんをからかって、高笑いと共にやってきたオルコットさんの挑発をスルーしてからかった程度だ。

…ああいや、そういえば一応今日に備えての行動もしたっけか。何もしないと姉さんに色々言われそうだったから。授業が終わった放課後はIS学園の資料室で様々な世界大会の対戦風景を映像で見たりした。

なぜか本音ちゃん他一部の女子もついてきて上映会みたいになっちゃってたけどね・・・本来止めるべきの山田先生もノリノリで解説役になってた。

ちなみに、一夏と篝ちゃんの剣道には僕は呼ばれていない。理由？いろんな意味で篝ちゃんが嫌がったんじゃないかな。

まあ、一応僕と一夏は敵同士だし、あんまり一緒に特訓するべきじゃないだろう。そこまで厳密なライバル関係を結びたいわけでもないけど、まあ要は気分の問題だ。

…そういえば、そもそも箒ちゃんは僕の身体能力については知らないのかな？一夏は僕と姉さんが一度だけ戦ったのを見たことがあるけど、アレは箒ちゃんが転校した後だった気がするし。

なら、ひよつとすると今回のことが終わった後で箒ちゃんの対抗心に火をつけちゃって『零夏！私と剣道で勝負しろ！』とかいう展開になるかも…

…いや、多分ないな。あの子はそれよりも僕にからかわれることが嫌で近寄らないだろう。苦手に思われているのは知ってるけど、箒ちゃんって不器用だからつい遊んだり助けたりしたくなっちゃうんだよね！。

「…はあ」

それにしても、憂鬱である。

一夏と戦うことに関して…では、ない。まあ流石にここまで来たらある程度は覚悟を決めたさ。憂鬱の原因はそちらではなく、もっと別の問題である。

今、僕は既に決戦の舞台（というのは大げさだけど）である第三アリーナの選手待機室みたいところで闘いが始まるのを待っている状態だ。

そう、問題はこの『待っている』という状況だ。何故僕がここまで延々と脳内の思考を垂れ流していたか考えてほしい。物事には何事にも理由というものがあり、この回想もれっきとした意味がある

のだ…ってまあ、これは大げさすぎるか。
要するに、僕は暇なのである。

「まーだ『白式』は到着しないのかなあ…」

僕がここに入ってから、既に四十分が経過していた。

いや、うん。原作で到着が遅れるのは知ってたけど、まさかここまで待たされるなんて誰が思うだろうか。

今にして思えば、姉さんが月曜日を僕と一夏の対戦日にしたのはこのための伏線だったのか…！『一夏が経験を積めるように』なんて身内贔屓をする人じゃないから不思議だったんだけど…赤の他人を待たせるよりは身内でいいか的思考だったんだね！僕の扱いが酷くて悲しい。

しかも、今の僕はピットに独り。一夏は篝ちゃんや姉さんと時間潰しができたかもしれないけど、僕にはそれすら無いよ！クラスの女子は本音ちゃんを含め観客席だし、山田先生は準備で大忙しだし！僕に味方はいないのか！

『呼んだ？』

「呼んでません」

貴方は味方かどうか怪しいじゃないですか。

「というかこの四十分ずっと僕のことを観察してたの！？暇だったんだからさっさと話しかけてよ！」

『お、期待通りのツッコミだあ！いや、そのリアクションが欲しい

がために待ってたんだよ！』
「やっぱりアンタは僕の敵か！！」

…しかし、前から思ってたけど…僕、明らかに監視されてるよね？
プライバシーはどこへいったのやら。

まあ、東さんはきちんと僕の精神に配慮して、極端な嫌がらせ行為は控えてくれていると信じてるよ。なにせやりすぎると姉さんの
O H A N A S H I
暴力が待っているからね。東さんもそこまで自由はできないだろう。
…ちなみに、場合によっては僕も参加します。あんまりにもアレな日常を見られていたら記憶喪失になるまであらゆる手段を強行せざるを得ない。そこらへん理解してますよね東さん？

『だだだ、大丈夫だよ！東さん特性センサーでそこらへんの節度はきっちり守ってるから！』

「いやいやいや。どんなセンサーだよ」
『すっごいセンサー！』

恐らくこれはツッコミを入れてはいけないところなのだろう。
うん、アレだ。篠ノ之博士は世界一イイイイ！としか言いようが無い。

ああそうそう、暇つぶしも兼ねて、どうして東さんが僕のことを『監視』してられるかの解説をおこうかな。これからの試合にも無関係じゃないし。

さて、今更説明することもないと思うけど、ISの対戦というものはそもそもお互いのシールドエネルギーを削りあい、先にそれを0にしたほうの勝ちとなる。

戦闘で多少装甲が吹き飛んだりして戦闘不能になることもあるが、基本的にはシールドエネルギーの有無で勝敗が決まる。当然ながらIS同士の戦いではこれが一番重要な要素なわけである。

どのように相手のエネルギーを削るか、自分のエネルギーを守るか…という戦術を各個人は組み立てて戦うわけだね。

しかし、ちよつと待つてほしい。この短い文章の中に、既に大きな落とし穴があるのに皆さんお気づきだろうか。普通の人なら何も問題はない…しかし、普通じゃない人にとっては明らかに致命的な問題がここには含まれているのだ。

「僕、そもそもISじゃないからシールドエネルギーが無いよ」
『仕方ないね!』

なんとということでしょう、僕は世界初・ISと戦うことができないIS保有者なのである! いや、戦闘はできるけどやったら色々ばれてバケモノ扱いされること間違いなしだ!

…そりゃそうだよ、そもそもが本人に話を通さず、東さん一人で勝手に嘘をでっち上げてやってたことなんだから様々な問題が浮上するのは当たり前なのである。

しかし、そこは天才・篠ノ之束クオリティ! なんと彼女はそんなまでをきつちり考えていたのである! なんとという(無駄な)手際の良さなのか! せつかくこれを理由に『勘違いです』って言おうとしたのにバカじゃないんだらうかあの人は! 畜生め!

エネルギー残量すら表示できない(というか無い)僕の『形のな

いIS』。そんな問題を解決するため、東さんが僕に用意したモノ
それが、『コレ』である。

『さあさあ、東さんの自信作をキリキリ取り出すんだよねーくん！』
「テンション高いなあ…えーと 『展開』」

キーワードを呟くと、ISが展開された時のような光が発生し
数瞬後、僕の手の中には褐色のスーツが収まっていた。

その名も 特殊多機能対ISスーツ、『令装』。

東さんいわく、ISスーツのような外見をしたこのスーツを使えば、僕は本来持っていない『シールドエネルギー』の残量を存在するように『見せかける』ことができる…らしい。詳しいことはサツパリわからないが。

このスーツは普段はどこぞとも知れない空間に収納されていて、僕が脳内で念じれば自動的に出てくるようになっていて。専用機持ちはISスーツを格納して自動展開するシステムがあつて、僕のはその応用だそうだ。ちなみに今はスーツをそのまま手に取り出した状態だけど、自動で装着することも可能である。

…いやいや、応用で済むレベルなんだろうかこれ？色々な意味でツッコミどころが満載じゃないか。出したりしまったりするエネルギーとか一体どこから引つ張ってきているのだ。あと何故僕が念じただけで出現するんだ。僕の身体にこっそり何かしてないだろうね
東さん…

まったくもって謎の技術である。…どうやったのか聞いてみたいけど、どうせロクなことにはならなそうなので話題を振るのが怖い。我慢しよう。

しかもこのスーツ、偽装だけでなく他にもオマケ機能が大量にく

つついている。IS間のコア・ネットワーク通信もできたり、位置情報のサーチとかも可能だ。そして更に、

「盗撮・盗聴する機能はとりあえず確実につけてるよね…」

「えっへん！どうだいれーくん！東さんを褒めてくれていいんだよ！！」

「うん、そうだね。次会った時にはアイアンクローをプレゼントするよ」

「えええ！？」

僕の怒りは、既に有頂天なのであった。僕パンチングマシンで計測不能とか普通に出すし。

こうして、東さんに誓いを立てたり、微妙に技術力に引いたりして更に二十分グダグダしていると　　ようやく、ピットに備え付けられていた端末が、ピーピーと音を立て点滅を始めた。

それを見て、緩んでいた空気が引き締まる。…と同時に東さんの気配も消えた。恐らくは、これから僕たちの試合を解析することに集中するのだろう。

静かに目を閉じる。…自分の意志とは関係なく、肉体が瞬時に準備を完了させていたことを理解しながら、その違和感を拭い去るように、僕は『令装』をの袖をギュッと握った。

今の自分は、どんな顔をしているのだろうか。

そんなことを思いながら、僕はぼつりと呟いた。

「ああ、やっと始まるのか」

一方その頃、零夏がいるのとは反対側のピット。

「ああ、やっと始まるのか」

様々な計測器を準備し終え、ようやく肩の荷が降りた織斑千冬は、ふとそんなことを呟いた。

かなり遅れて到着した『白式』は、既に一夏に装着され出撃している。なんの準備もできていない状態だが、そのあたりは零夏との戦闘でなんとかしてもらうしかないだろう。

『むしろ私の弟ならばその程度なんとかしろ』などと思っているあたり、彼女の厳しさや信頼が見て取れる。

「そうですね…結局、零夏くんは随分待たせてしまいましたよね？
後で謝っておきましょうか…」

「なに、気にするな。零夏だから問題ない」

「ええっ！？いくらなんでも扱いが酷すぎませんか！？」

「ち、千冬さん…厳しいですね…」

「アイツも一応『兄』だからな。というか篠ノ之、織斑先生と…いや、今は放課後だ。別にいいか」

…これも厳しさや信頼ゆえだろうか？

真耶が思わずツツコミを入れてしまうくらいに、零夏の扱いは残念であった。本人が聞いたなら『ひどいや姉さん！横暴だ！この休日下着女め！』などと叫んで千冬にブン殴られそうな台詞である。

さて、現在、この場にいるのは三人。織斑千冬、山田真耶、そして篠ノ之箒だ。

一般生徒にすぎない箒が何故ここに居るかという点、ずっと一夏と『白式』を待っていたために観客席のほうは既に空席が無くなってしまっていたからだ。今回の試合にはクラスメイトだけでなく、一学年の生徒のほとんど…どこるか、全校生徒が押し寄せている程である。

実は集団にいるのが苦手な箒だ。千冬のこの配慮には非常にありがたく、先程は深々と頭を下げていたりもした（故に、零夏の扱いの酷さには若干引いていたりもする）。

「あ、一夏くんが出てきましたね」

「！」

真耶の言葉に反応して、箒はISを纏った一夏のほうに目を向ける。

開いたゲートから飛び出した一夏は、エアリーナの外周を飛んで

時折調子確かめるようにぐるりと宙返りしたりしていた。

時折見えるその顔立ちは凛々しく、何箒は六年の歳月を経て成長したその顔立ちについ魅せられた。観客席からキヤーキヤーと歓声が飛ぶのに多少ムツとしながらも、箒は自分の鼓動が早まっているのを感じて、彼女は胸に手を当て、こっそりと呟く。

「…一夏、頑張れ…」

「やれやれ。アイツも大人気だな」

「っ!?!」

「ふむ、零夏も出てきたか」

小さな呟きに返さらっつと答されびっくう!と身体を震わせる箒。

しかし言った本人はそちらのほうを向かずに、ただもう片方の弟に関心を寄せていた。

聞かれた恥ずかしさに顔の紅みを深めながら、箒はバツが悪そうに画面に目を戻し、

「え?」

身体を硬直させた。

目の前のスクリーンには、解放されたゲートの淵に佇む零夏が映っている。

流星に人間のサイズにカタパルトは使えなかったのだろうか、零夏は金属の床の上を歩いて移動していた。その身体は褐色のスーツで覆われており、見た目だけなら先程の一夏の格好と似たものだ。違うところは、彼のスーツには腰に布のようなものがアクセントとして巻きつけられている程度だろうか。

そう、ただ彼は歩いているだけだ。こちらの方を向いてすらいない。

それだけなのに　　箒はなぜか、鳥肌が立った。

「…なんだ、アレは」

先程とは違う意味で、どくんどくと鼓動が早くなるのを感じる。それに気付けたのは、がむしゃらながらも箒が剣道に打ち込んでいたからだろうか。

剣道など、武術を学ぶ者なら誰もが習得する『眼』。観察眼と言い換えることもできるだろう。そして、常人よりも優れた箒の眼は、今の零夏を見てある一つのことを語っていた。

アレは、ニンゲンを超越している。

気を抜いているだけで彼の『気』に吞まれるような錯覚を覚える箒を横目に、モニターの中の時間は止まらずに進んでいた。

『来たのか、零夏。…本当に『カタチがないIS』なんだな。そうしてるとただのコスプレにしか見えねえや』

『遅れたのはそっちの方だよ？しかし、一時間以上待たせたくせに

ファースト・シフト
まだ一次移行も終わってないとは。姉さんは何か言ってた？」

「…千冬姉には「ぶつつけ本番でなんとかしろ」ってありがたいお言葉を貰ったよ」

「ふむ。ひよっとして僕は姉さんに面倒ごとを押し付けられたのかな？」

話しかける一夏に、零夏は文句も混ぜつつ言葉を返していた。大勢の観客が2人に注目するが、流石に彼らも視線にはもう慣れていく。

静かに笑う零夏に、いつものような緩みは見当たらない。むしろ言葉の端に喜悦を滲ませ、零夏は一夏と向かい合っていた。その目に見えない圧迫感に、少しづつ観客席のざわめきが消えていく。「白式」のハイパーセンサーを通すまでもなく、一夏も理解していた。

(零夏は…本気だ)

彼は既に戦闘態勢を終えている。…攻撃してこないのはあくまで、自分の『準備』が終わっていないからに過ぎない。それはまさに、相手が剣を抜くまで自分は切りかからない、という一種の『余裕』だった。

嘗められている、と一夏は思わない。

むしろ当然だと思った。

(零夏は、千冬姉よりも強いんだ)

取り出したブレードを知らず知らずのうちに強く握って、一夏は目の前の『兄』を見据える。

(そうだ、決まっているじゃねえか)

奇しくも、零夏の持つ『原作』と同じ思いを、彼は心の中で宣言していた。

() 他のあらゆる面で負けているなら、せめて心だけは負けな
いようにするんだ…!!)

『いい表情だね』

『弟』の顔を見ながら、『兄』は薄く笑ってそんなことを呟いた。

不意に トン、と零夏が跳躍する。

「っ!?!? 零夏くんっ!?!」

「落ち着け、大丈夫だ」

思わず真耶が叫んだのを、千冬が制する。

彼女の言ったとおり、ゲートの淵から跳んだ零夏はそのままア
リーナの土に音を立てて着地するも、平然と立ち上がって一夏を見
上げた。

負けじと一夏もそれを睨み返す。不敵に笑う兄の姿に、自分の口
の端も釣り上がるのを一夏は自覚した。

『ビルからいつ飛び降りても大丈夫そんな強度だな、零夏』
『むしろ飛び移るくらいはできそうだけどね。…さて、一夏』

軽口を言い合いながらも、それでも2人の間の空気は張り詰めている。その空気が限界に達し、双方が激突するのはもうすぐなのだ、この場の全員が理解していた。

『今から始まるのはあくまで前座だ。戦闘とは呼べない、むしろ訓練といふべきモノだね』

『…今の俺は、闘う相手として不足だつてことか？』

『その通り。一夏はまだ不完全だからね。自分が一番わかってるだろっつ。』

『…そうだな』

思うところがあるのか、苦々しく返答する一夏。

それを見て、真耶は眼鏡の位置を直しながら、千冬に自らの疑問をぶつけた。

「織斑先生、これはつまり…」

フェースト・シフト

「一次移行を終わっていないことを言っているのだろうな」

「…『専用機』として成立していない状態では、零夏にとって一夏は『敵』ではないと？」

不思議そうに、というよりは不可解な表情を浮かべた筈も、それに口を挟む。

彼女にとってISはあくまで『道具』であり、セシリアのような専用機を持つことに対しての誇りは無い。故に、自分と同じようにそんなことには執着しないであろう零夏が、どうしてあのようなことを言い出したのが気になったのだ。

「ここで問題になるのは『専用機』ではないな。言ってしまうれば、今の一夏は刀を鞘から抜く方法すらも知らずに戦場に立っている状態だ」

「…あるいは、銃に弾を込めるやり方を知らない、ですか？」

「そうだ。だから、零夏は『これは実戦ではない』と言っているのだらう」

戦場に立つならば、武器を持つ者はその務めを果たさなければならぬ。

それは、千冬が一夏に学ばせたかったことでもある。『あらゆることには責任が伴い、人は何かをしたならばその対価を背負わなければならぬ』。かつて、千冬が一夏に言った台詞だ。

この言葉は、今すぐにやれ、出来ないならば止める という意味ではない。

出来ないならば、出来るように努力する。途中で投げ出さず、最後まで真摯に自分が行ったことと向き合い続ける。それが、生きていくために一番大事なことなのである。

「要するに、零夏は『今から刀の抜き方を教えてやる、これが実戦なんて思うな』と言いたいのだらうさ」

「…つまり、零夏くんは『実戦』をしたことがあるんですか、織斑先生？」

「その辺りの話はまあ、そのうちな。とはいえ今回のことは丁度良かった。ISというものは持ち主に適応するように出来ている。あいつの場合、実際に戦うのが一番いい方法だらう」

「千冬さんはそこまで考えて、オルコットの前にあの2人を戦わせたのですか…？」

「…いいや、そんなことは考えていなかったさ。なにせ私は」

あいつらの姉だからな、どちらかを鼻屑するわけにはいかな
いんだ。

最後の言葉は口に出さず、千冬は『弟達』を見続ける。

こうして話をしている間にも、一夏と零夏は言葉を交わし続けて
いた。

『まあ、一夏ならすぐ闘えるレベルにはなるだろうさ。一夏の『準
備』が終わるまでは武器を使わないであげるから、さっさと調整を
終わらせてるようにしてよ?』

『…む、ちよっと待て。今、思いつきり手加減する宣言したよな?
もう既にしてもらってるのに、そんなハンデ貰えねえよ』

『なーに言ってるのさこのヒヨっ子め。そもそも、こんな僕に対し
て今からそのデカい刀で遠慮なく斬りつける気だろう?もし一夏が
強いなら、刃を当てないように闘うことぐらい余裕でしょ。できる
の?』

『いやいや!お前に対してそんな加減できるわけないだろ!千冬姉
ですらないぞそんなこと!』

『え、その発言は割りとシヨックだなあ。…まあ、戯言はこれくら
いにしようか』

そう言って、上空の一夏へ手を差し伸べるように延ばし 零
夏はニヤリと笑って、言った。

『僕に剣を抜かせると言うなら 強くなりなさい』

分かり易い挑発だ、と一夏は思う。けれど、彼にとってその言葉は心地いいものだった。

箒の特訓で、自分が怠けていたことはわかっている。零夏の言葉は正しいのだ。今の自分は周りの誰よりも底辺に居て、だから彼の敵にすらなれていないのだと彼は思う。

でも。

ここがドン底なら、この先は這い上がるだけだ。

『ハッ 上等おおおおおおおおおッ!!』

兄の言葉に応えるように、満面の笑みを浮かべながら一夏は叫んだ。

同時に、『白式』を地面に向かって 零夏のもとへと加速させる。

最初の一撃は肝心だ。だから、今の俺の全力を振るう。そして、その次の一撃は先程の『全力』よりも強く振るう。そうすれば、いつか『戦場』に辿り着き、いずれかは他の皆に、箒に、千冬姉にそして、零夏に届くはずだ。

だから応えろ、と一夏は強く念じる。この一瞬にも、視界の端に映るデータは彼に最適化されていく。それでも足りない。彼には届かない。もっと、もっと強くなりたいと、彼は願う。

『行くぞ、白式いいいいっ！！』

接近しながらブレードを振りかぶる一夏に対し、零夏はその場を動かなかつた。

ただ拳を構え、ギシリ、と全力で力を込める。

彼は、自分のことを強いと思ったことなど無い。力は借り物で、思考は偽物。こと戦闘に関して強いのは『僕』でなく『彼』であり、ただ力だけ手に入れてしまった自分はひどくチグハグだ。

こうしている今も、心は力に溺れてしまいそうになる。自分には力があるのだ、と。それを使えば全ては思うがまだ、という欲が溢れ出しているのを、僕は必死に抑えつけている。　　ああ、こんな気分になるから、戦うことは嫌いなんだ。

だからこそ、一夏には強くなつてほしいと思う。自分とどこか似ている弟に、『力と強さは別物なのだ』と教えてやりたい。

だから、零夏は呟いた。

『行くよ、ヘラクレス…!』

自分は、英雄ではないのだと。

一夏が迫る。白になろうとする刃が振り下ろされる。

零夏が迎え撃つ。英雄になるまいとする拳が振り上げられる。

そうして、互いの刃と拳が、激突し

戦いの火蓋が、切って落とされた。

Life 6 強さの在り処、強者の在り方（後書き）

ちなみに推敲がまだ後半部分終わってません。

修正は明日の夜になっちゃうかなあ…違和感ありましたら申し訳ありません。

さて、本編の話ですが…束さんのチート発明の原理についてはツッコミ禁止です。もうアレはそういうものなんだと思ってください。『令装』の外見についてはバサカというよりホロウのアヴェンジャ―みたいな服装（のタイツ版）をイメージして下さればと。コスプレですな。

今回の話では『強さ』がテーマでした。一夏にとって零夏は千冬さんと同じくらいに『強い』存在ですが、零夏は自分のことなんて全然強いなんて思ってません。人の認識の差というものですな。

ちなみに、一夏がなんで零夏を強いと思ってるかは色々理由がありますのでこの後の展開をお待ちください。姉さんとの勝負云々も然り。

で、今回の話で語られている『ISの初期設定すら終わらせていない一夏は弱い』という言い回しですが、これは一夏が弱いという問題ではなく、LV10のキャラクターがLV1（初期状態）のキャラのことを『力不足だ』と言っているイメージで書いたつもりなのですが…伝えられているでしょうか。

零夏がやるうとしてるのは、『オマエもう経験値は溜まってるんだからさっさとかぼたんのトコ行って能力上げて来い』ということですね。逆にわかりづらいか…

ちなみに、先程の認識の違いの話をLVで例えると、零夏は自分のことを『LV5のくせにチートで能力だけ上げたヤ』、というよう

に捉えていますが一夏にとっては千冬さんと並んで『LV99の最強キャラ』です。

『自分は強くない、力があるだけだ』というのは転生チートモノで僕がよく考えることのひとつです。

今回の話は『力を手に入れた人は、自分のことをどう思うんだろう？』という疑問がテーマですね。

俺TUEEEEの展開も僕は好きですが、自分に自信が持てない人間は強すぎる力をどう思うのでしょうか。

零夏が武器を取り出さないのは、本当に一夏への手加減だけが理由なのでしょうか？

なーんてことを書きまくっていたせいで8000字も書いたくせに戦闘パートを終わらせられませんでした。

俺のバカ野郎があ！短くまとめる能力が欲しいです。

ところで、非常にどうでもいい話なんですがFate/zero非常に面白いです。ウェイバーさんの可愛さ、ライダーのかつこ良さ、アサシンの踊りっぷりなど見所がありますね。

作画も演技も一級品です。明らかな名作になることは間違いないでしょう。

でも何よりもイリヤが可愛いすぎだろオオオオオオオ！キリッ
グズルしてたーとかよおおおおおー！もう可愛くて死ぬようござ
アアアアアアアアアア！！

そんなFate/zero、ご覧になっていらっしやらない方は是非ご視聴をお勧めいたします。本当に面白いですよ〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669x/>

僕は違います

2011年10月19日06時08分発行